

追加版

寺島の歴史を探る

その35～51



寺島自治会

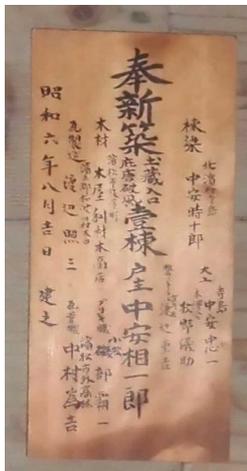
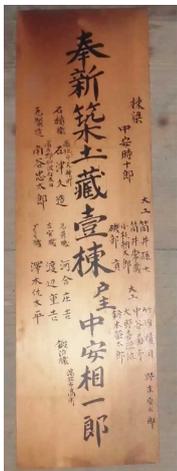
回覧

令和3年度浜松地域遺産（認定文化財）に 中安家土蔵と半僧坊里程石

令和3年度に寺島自治会が申請した「中安家土蔵」と「寺島の半僧坊里程石」が浜松地域遺産（認定文化財）に認定されました。

これまで「寺島の道祖神」「西隠寺の椿葉師像」「大伝寺の弘法大師像」「寺島山王の秋葉山常夜灯」が認定されていたので、寺島の認定文化財は合わせて6点となりました。

今回認定された「中安家土蔵」と「寺島の半僧坊里程石」については、これまでの回覧や冊子でも紹介してありますが、改めて詳しく紹介します。



大正10年と昭和6年の棟札

○中安家土蔵

大正時代から山中織物を営んでいた中安家（中安相一郎氏）の土蔵は、棟札によれば大正10年12月に上棟された2階建て、桁間5間、梁間2間半の近隣にはない大型の土蔵です。漆喰壁で4段の折れ釘が並んでいます。基壇は天龍石です。昭和6年8月には唐破風の庇に改築されています。棟梁は共に寺島間渡の中安時十郎氏です。

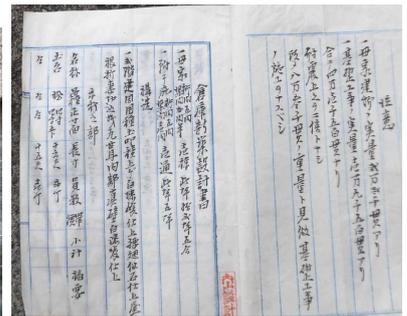
庇には富と幸せをもたらすという瓦製の七福神が載っています。中央に大黒天、その左右に恵比寿・布袋・（弁財天）・毘沙門天・福祿寿・寿老人が並んでいます。（現在、弁財天は失われています）

地窓（床下換気口）の石扉に^{ひし}今の屋号、軒瓦に家紋が付けられています。

設計書も残され、注意書きとして、建物と基礎の実量が合わせて4万1千5百貫（約156トン）あるから、耐震上これを2倍となし、8万3千貫とみなして基礎工事をするようにと書かれています。



地窓の屋号



新築設計書

○寺島の半僧坊里程石

奥山半僧坊は、明治14年の方広寺大火にて類焼を免れ、優れた靈験があると広く信仰を集めるようになり、多くの参詣者が訪れました。

各地から半僧坊へ参詣に向かう道「半僧坊道」がいくつもあり、笠井から寺島を通り小松を通る道や、笠井から寺島を通り西ヶ崎を通る道もありました。明治10年代後半に、参詣者のために半僧坊までの道のりが刻まれた里程石が多く建てられ、寺島にも4基の里程石が残されています。

設置場所の地図は、回覧「寺島の歴史を探る」その7を御覧ください。



- ① 「五里十五丁」 (約21.7km)
「寺島村袴田□□
袴田□□
□□□□」(3名の名)
(袴田重一氏宅角)

*ほぼ全体が残されている。
*道のりがはっきりと分かる。

- ② 「□□□四丁」(五里十四丁か)
左側に「(半)僧坊」右側に「(岩)水(寺)」
か？ わずかに判読できる。側面は不明
(袴田誠二氏宅北東角)
*もと袴田誠二氏宅前の旧道角にあった。
*現在ブロックに囲まれ、ほぼ全体が残されている。文字が半分ほど欠損している。
*道標を兼ねていると思われる。



- ③ 「□□□二丁」(五里十二丁か)
「大村武平 中安吉平」
(市川正昭氏宅向かい)

*上部が欠損している。
*ごみ集積所の後ろに置かれていたものを建て直した。

- ④ 「五里十□」^{くち}「右□□平□ 左半僧坊」
「明治十八年三月□」
(袴田三男氏宅庭)

*もと笠井から西ヶ崎を通る道筋にあった。(若草団地南端交差点東、袴田氏の土地の角)
*道標を兼ねている。下部が欠損している。

回覧

「寺島の歴史を探る」その36

作成 寺島7班 太田隆雄

「遠江国風土記伝」に記された寺島



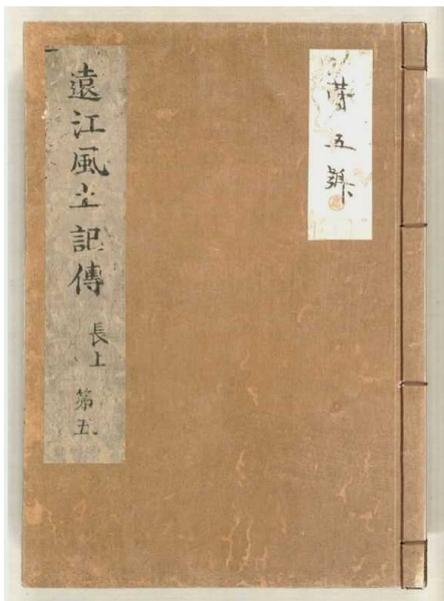
内山真龍80歳の自画像
(内山真龍資料館)

江戸時代に「遠江国風土記伝」を執筆した内山真龍^{うちやま 真}は、豊田郡大谷村（天竜区大谷）の名主を務めながら、賀茂真淵に入門し国学を学びました。実際に現地調査を行い多くの本を記しています。82歳の生涯は、名主として大谷村の発展に尽くすと共に国学の研究、弟子の育成に努めました。

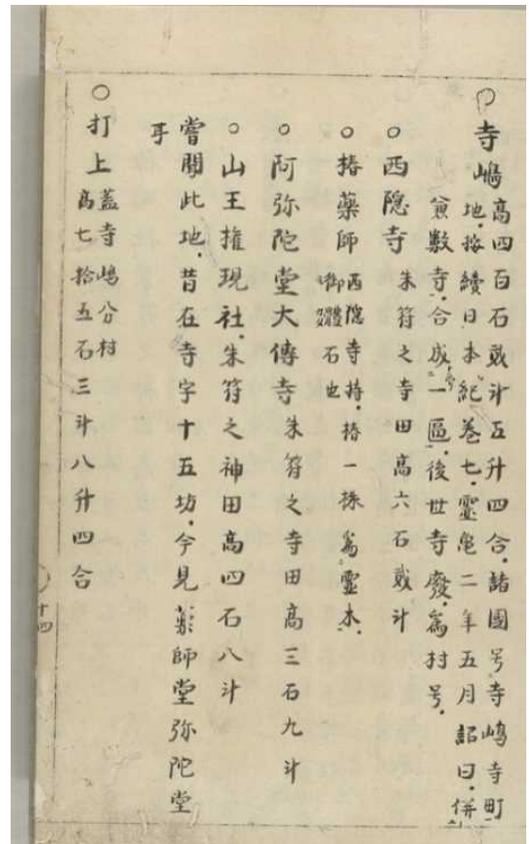
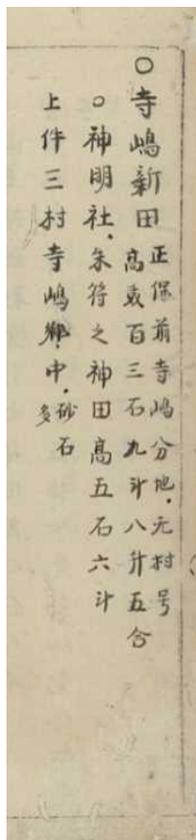
「遠江国風土記伝」は、遠江国13郡下の郷名・村・駅・地図・古述・戸跡や元禄高帳による石高・口碑伝説などが記され、各郡を1巻として13巻からなり、完成までに10年の歳月を費やしています。

寺島については、寛政4年5月（1792）に完成した第五巻（長上郡）に記されています。

裏面に「現代語訳遠江国風土記伝」の美蘭庄寺島郷の部分に掲載します。



遠江国風土記伝 第五巻（長上）
(浜松市文化遺産デジタルアーカイブより)



美蘭庄 寺島村・打上村・寺島新田村

寺島村の石高は、西隠寺・大伝寺・山王権現の朱印地を含む。寺島新田村の石高は、神明社の朱印地を含む。寺島三村は皆畑の村で、米に換算した石高。年貢は金納。

【寺嶋】 高は四百石二斗五升四合、諸國に寺島寺町と號する地あり、按ずるに續日本紀卷七靈龜二年五月の詔に曰く「數寺を併兼し、合せて一區をなす」と、後世寺廢して村號と爲る、

〔西隠寺〕 朱符の寺田の高六石二斗、

〔椿薬師〕 西隠寺持ち、椿一株を靈木と爲す、御體は石なり、

〔阿彌陀堂大傳寺〕 朱符の寺田の高三石九斗、

〔山王権現社〕 朱符の神田の高四石八斗、

嘗て聞く、此地は昔寺宇十五坊ありき、今は薬師堂彌陀堂を見るのみ、

【打上】 蓋し寺島の分村なり、高は七十五石三斗八升四合、

【寺嶋新田】 正保前は寺島の分地なり、村號無し、高は二百三石九斗八升五合、

〔神明社〕 朱符の神田の高五石六斗、

上件の三村は寺島郷の中なり、砂石多し、

かつて天竜川の流れと氾濫により形成された土地

神明社 美菌御厨ミコリヤを守護するため勸請された神社と推定されている。内宮と外宮の二社。朱印地は寺島新田村。明治七年に合祀し、神明宮となる。

元和・寛永頃分村

寛文末頃分村

三石五斗の誤り

朱印状。將軍より寄進された石高

我が寺島に該当しない

1619~26頃 1671~72頃

坪井俊三氏によると、真龍は寛政元年(1789)3月19日~21日、浜松近辺から浜名湖南・湖北三ヶ日にかけて弟子と共に現地調査をし、「真龍日記」には「19日寺嶋村椿薬師参詣。その薬師はかつて十二坊あったが、元龜年中の兵火により焼失」と記されているという。(「その薬師」は西隠寺のことか) 武田軍侵攻前の戦国時代までは多くの坊(僧の住居)があったらしいこと、江戸時代に椿薬師が知られていたことが分かる。

<訂正とお詫び>

* 回覧及び冊子「寺島の歴史を探る」その21 (P50)の年表の内、「元和元年(1619)」は、「元和5年(1619)」の誤りでした。訂正しお詫びします。

回覧

「寺島の歴史を探る」その37

作成 7班 太田隆雄

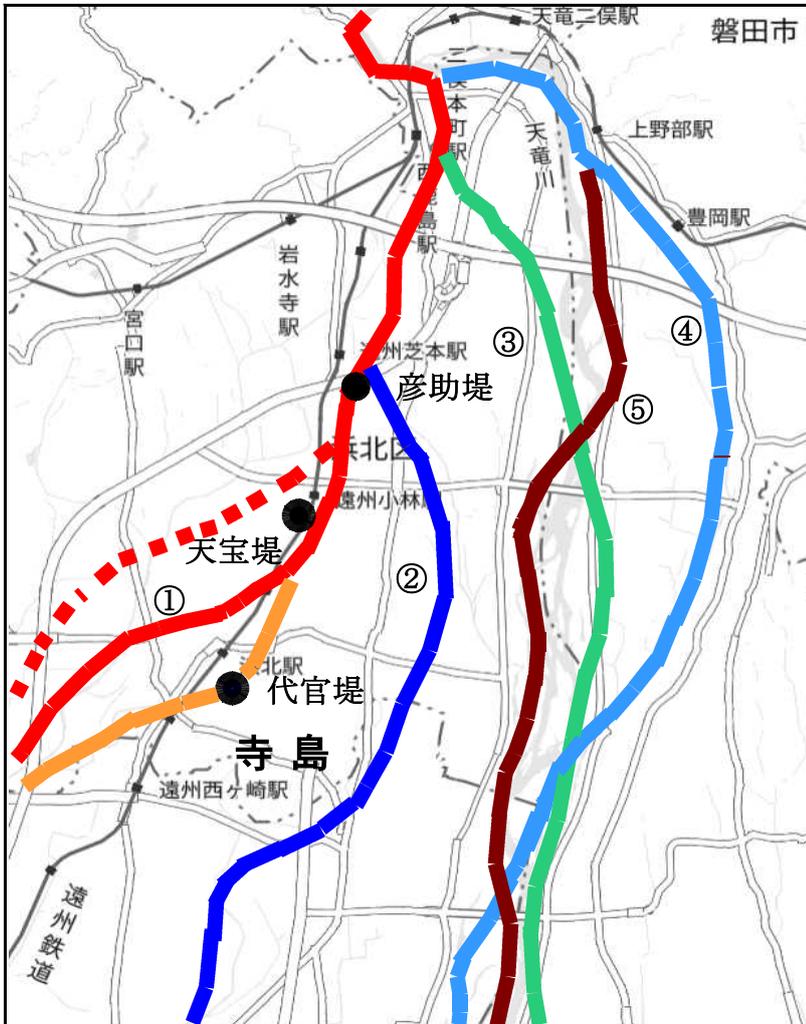
天龍川の流れと寺島

遠州平野の天龍川は、時代によって流路が変わり、多くの川筋に分かれて氾濫を繰り返しました。

奈良時代の本流は平野部の西付近を流れ、平安時代中頃には、美蘭や寺島の東へ移り、平安時代末には東端の磐田原台地の下を流れました。そして室町時代の中頃、南部では池田宿の西に流路を変え、江戸時代終わり頃には、北部も現在の流路に近くなりました。

江戸時代に磐田原台地寄りの本流を「大天龍」、三方原台地寄りの支流は、「小天龍」と呼ばれ、小天龍の主な流れは、「浜松領分絵図」(1680年頃)では、本沢合・西美蘭・沼から代官堤がある横須賀・小松・西ヶ崎を通り、現在の馬込川に通じていました。

○ 天龍川本流のおよその流路 (推定) (太田作成) (■■■■■ 更に古い流れ)



国土地理院電子地形図 (タイル) を使用

① ■■■■■
 奈良時代頃から平安時代初め頃
 <古名> 麿玉河・荒玉河
 広瀬川

- ・「続日本紀」荒玉河に天宝堤が築かれる。(761)
- ・江戸時代の支流小天龍、現在の馬込川筋になる。

② ■■■■■
 平安時代中頃
 <古名> 天中川 (天ちう川)

- ・「更科日記」(1020)
- ・寺島の東付近を流れる。
- ・現在の安間川筋になる。

③ ■■■■■
 平安時代末から室町時代初め頃
 ・「天龍河」「天りう」

- ・天龍川とよばれる。
- ・池田の東を流れる。
- ・「池田庄立券文」(1171)
- ・「東関紀行」(1242)
- ・「十六夜日記」(1277)

④ ■■■■■ 室町時代中頃から江戸時代中頃 ■■■■■ 江戸時代の小天龍

- ・「天龍川」池田の西を流れる 東国紀行(1544)・「浜松領分絵図」(1680頃)
- ・江戸時代、小天龍に彦助堤(1675)・代官堤(1750)(横須賀)が築かれる。

⑤ **江戸時代終わり頃**

・「天龍川」 浜北付近も現在の流路近くになる。



天寶堤

○天龍川の氾濫と築堤

奈良時代 <天寶堤>

天平宝字5年(761)荒玉河決壊のため修築(続日本紀)

決壊三百余丈(約900m) 動員延べ三十万三千七百余

人・遠江国風土記伝第五に「北は道本村に起こり、南は有玉の広瀬村に盡く 郡中(長上郡)に古塘(堤)多し」(内山真龍編著1792) ・現在は18mのみ残る。

江戸時代 小天龍 ○天正年中、慶安年中(1648~51)小天龍の締め切り工事

○延宝2年(1674)寅の満水で破堤

<彦助堤> 延宝3年(1675)3月~4月築堤工事

○浜松藩と旗本近藤家が請け負った。場所は新原村庄屋松野彦助所有地により彦助堤という。伝説では、難工事のため彦助が自ら人柱になったという。延享2年(1745)にはさらに築堤を延長した。現在300m残る。

○宝暦7年(1757)の本沢村絵図に「彦助堤切込ミ…本沢村真先ニ入水、水下六十ヶ村浜松御城迄入水」とあり、築堤後も氾濫を繰り返した。

<代官堤> 寛延3年(1750)横須賀村で小天龍の氾濫から守るために修築した。担当代官の職名から代官堤という。全長約1km・高さ約1.8m(現在は失われている)



彦助堤 (新原)



小天龍跡 (横須賀・浜北郵便局東)



小天龍代官堤跡 (横須賀)

○天龍川の流れと寺島 天龍川本流は、平安時代中期頃に寺島付近を流れ、東に移った頃に開発が進められて平安時代後期には美菌御厨が成立していました。砂石が堆積した少し高い土地には寺島の神明社が創立され、今の神明宮周辺地域に鎌倉時代の山茶碗が発見されていることから、その地域に寺島の人々が生活していたことを示しています。

江戸時代の初めには小天龍の締め切り工事により流れが少なくなり、開発によって寺島村から分村し、寺島新田村・打上村が誕生しました。(「寺島の歴史を探る」その1参照)

寺島の資料はありませんが、その後も多くの村ではたびたびの洪水による亡失、境争い等、深刻な問題をもたらしました。こうして、天保2年(1831)幕府の命により天龍川水防組合が発足、117ヶ村々が協同して天龍川本流の水防にあたらせました。その内、川付きの6ヶ村と寺島三村を含む10ヶ村は、上善地村より末嶋地内常光村境まで2,998間(約1.67km)を受け持ち、決壊の危険がある際には、村高に応じて唐竹・明俵・縄を差し出し、人足となって堤防工事に参加しました。

<小字名> 寺島には、「清水」・「間渡」・「土居上」(堤)・「土居下」・「河原西」・「井戸尻」・「池ノ尻」等の流路や水に関わりの深い小字名が残されています。

*参考 「郷土浜北のあゆみ」「浜松市史」「川と生活」「浜北市史 浜北と天龍川」ほか

回覧

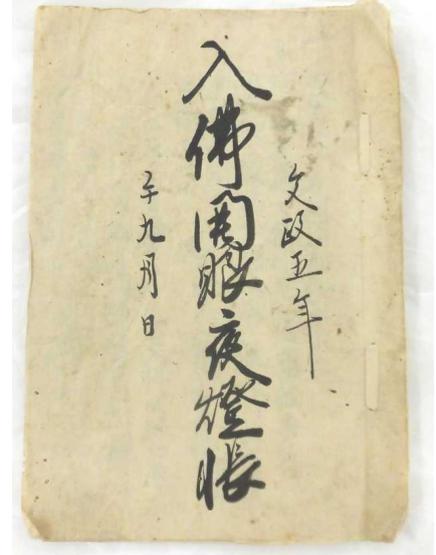
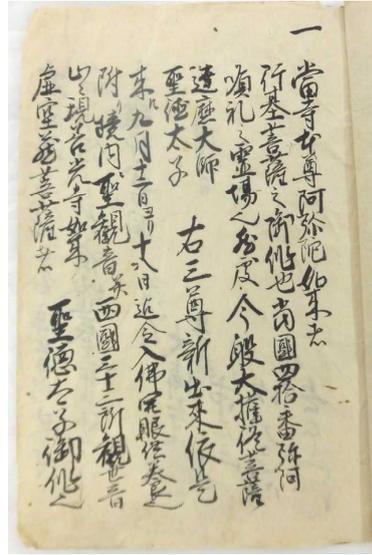
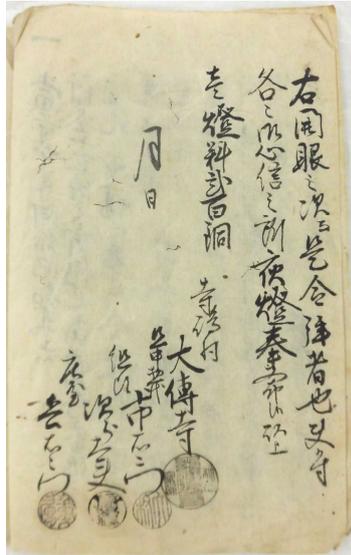
「寺嶋の歴史を探る」その38

作成 7班 太田隆雄

大伝寺・西隠寺の資料紹介

○入佛開眼夜燈帳（大伝寺）

浜松市博物館所蔵



文政五年（一八二二）
入佛開眼夜燈帳
午九月日

當寺本尊阿弥陀如来者

行基菩薩之御作也 當國四拾番阿（弥陀）

順礼之靈場也 然 處今般大権修（利）菩薩

達磨大師

聖徳太子 右三尊新出来依是

来ル九月十二日ヨリ十八日迫令入佛開眼供養也

附リ 境内ニ聖観音并 西國三十三所観世音

出現善光寺如来

虚空蔵菩薩 者 聖徳太子御作也

右開眼之次而是令 拜者也 夫尔（？）付

各々御心信之所夜燈奉 希候 以上

壹燈料 貳百銅（二百文）

寺嶋村

月日

大伝寺

印

且中惣代（檀中総代）

市右衛門

印

組頭

次郎太夫

印

庄屋

兵右衛門

印

*振り仮名と（ ）は、太田

文政5年(1822)、大伝寺に大権修利菩薩(伽藍を守護する)・達磨大師(禅宗の始祖)・聖徳太子の尊像が新たに造立され、開眼供養を開くにあたり、境内の聖観音・三十三観音などへの参拝、また、それぞれの信心により夜燈の寄附(一燈二百文)を願う文書です。聖徳太子像は現存しませんが、現在も境内に聖観音(再建)の台座があり、当時のものかと思われる三十三観音が、本堂に遷され安置されています。(その3・その26参照)また、遠州四十八願所阿弥陀巡礼があつて、大伝寺は40番霊場となっていたことが分かります。

○住職の乗物駕籠（西隠寺）



修復前の乗物駕籠



修復後の乗物駕籠



安政三歳
辰三月廿二日
宗安寺
御役寮様

塗師屋
佐五郎
作人

*振り仮名と（ ）は、太田

安政三年（一八五六）
下都田村吉景 塗師屋佐五郎作人
辰三月吉日 三人作 弥平
儀市郎
作弥

平成26年からの西隠寺の本堂建て替えに伴い、本尊ほかの修復が行われました。住職が奥山方広寺との往復に使用したという乗物駕籠の修復時に、駕籠内から2枚の木札が発見されました。形状から駕籠の天井部分に取り付けられていたものと思われます。

駕籠は、安政3年（1856）に下都田村吉景（北区都田町字吉影）の塗師屋佐五郎ほか3人により製作されたものです。納め先が、宗安寺役寮（明治初め廃寺となった細江町中川新屋の宗安寺である可能性）とあり、質素儉約に努め西隠寺を中興した18世頑翁和尚が、宗安寺から譲り受けたのではないかと思います。（その3・その20参照）

回覧

「寺島の歴史を探る」その39

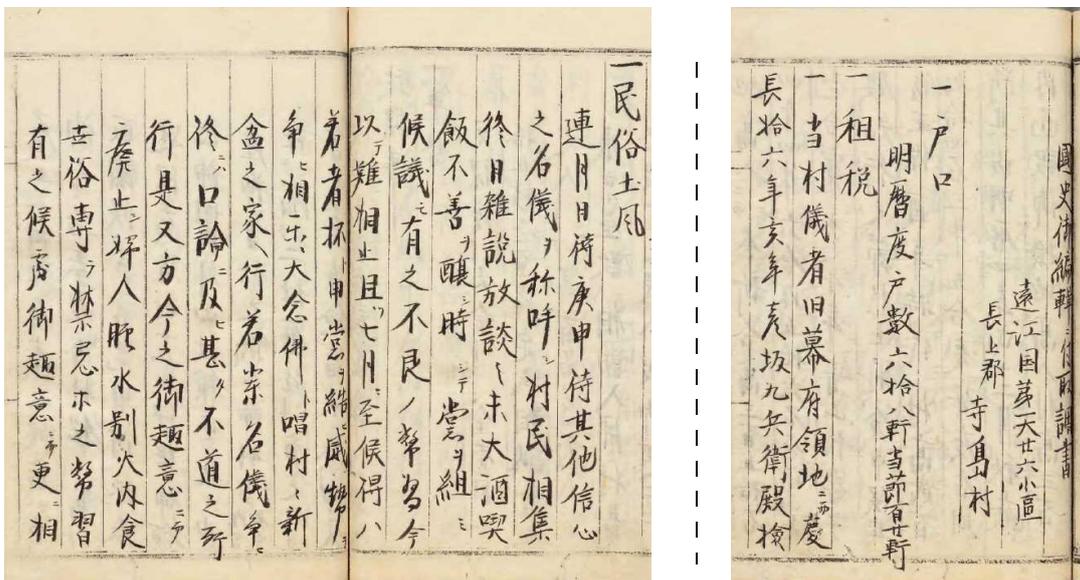
作成 7班 太田隆雄

へんしゅう
明治初めの国史編輯調べ

明治7年11月、明治政府は国史編纂の材料を収集するため、各府県に県の沿革等を取りまとめ提出するように命じました。

写真は、明治8年2月に浜松県の第一大区廿六小区内の各村（寺島村・寺島新田村・打上村を含む）の調査を取りまとめたもの「区内各村取纏帳」の一部で、各村の末尾に戸長の氏名と印があり、県令に提出されたものです。（参考 浜北市史資料編 近現代）

各村の項目は、戸口（戸数）・租税・法律・賞賜・会計・軍務・民俗土風などです。この中で、寺島三村の「民俗土風」について書かれた内容の一部を紹介します。



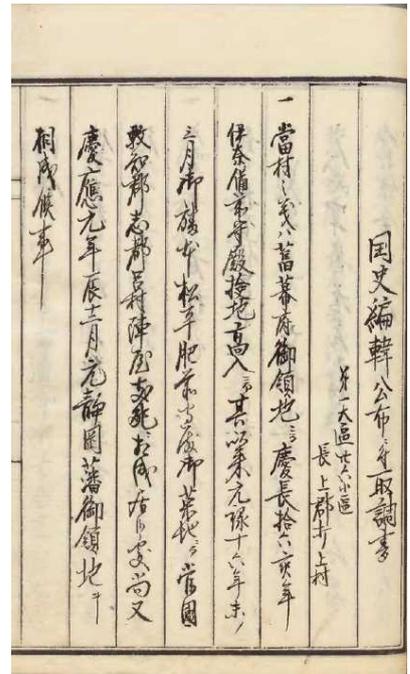
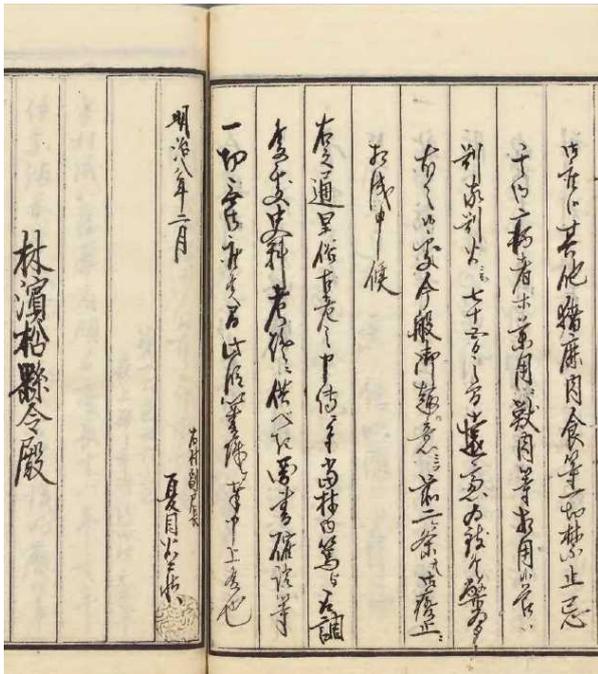
各村取纏帳（寺島村）の一部

（国立公文書館デジタルアーカイブより）

「連月、日待庚申待、その他信心の名義を呼称し、村民相集い、終日雑説（うわさ）放談の末、大酒喫飯（飯を食う）不善を醸し、時として党を組み候儀もこれ有り、不良の弊習（悪いならわし）今もって相止みがたく、かつ、七月に至り候得ば、若者などと申す党を結び、威勢を争い、相互に大念仏と唱え、村々新盆の家に行き、若輩名義争い、終には口論に及び、甚だ不道の所行（所業）これまた方今（ただ今）御趣意（国のお考え）にて廃止し、婦人経水（月のさわり）別火、肉食世俗専ら禁忌等の弊習これ有り候ところ、御趣意にて更に相廃止し、一同有り難く存じ奉り候、右はかねて御布告畏れ奉り、当村銘々とくと取り調べ候ところ、古老申し伝えに依って述べ奉り候」（寺島村）

* お日待ちや庚申待ちなどで、うわさ話・大酒飲み食事で悪い気風を作ること、大念仏で口論をする非道の所業があり、国の考えに従って廃止、女性に禁じる悪い習わしも廃止することになり、有り難いと述べています。、これらは古老の言い伝えによるので、考証に供する資料や図書・書面はないとしています。

実際は、明治以後、大念仏は衰退の中でも続いたようで、日待・庚申待の風習も残りました。（打上村では、「民俗土風」の中で、鉦・太鼓・幡幟など大念仏の道具は、全て売却したと述べています。）（参考「寺島の歴史を探る」その8・その11）

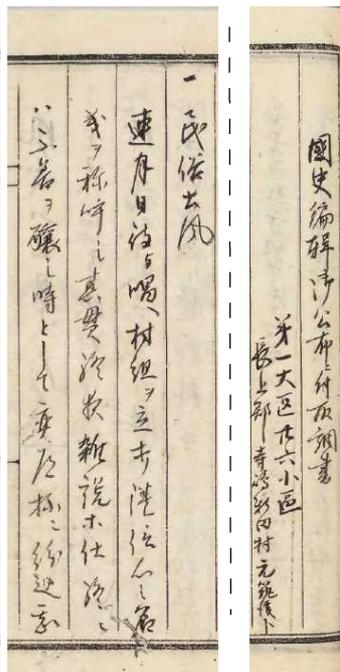


各村取纏帳（打上村）の一部

（国立公文書館デジタルアーカイブより）

「秋葉防火の神九里四方、氏神氏子と唱え、婦人の経水を穢れ物と唱え、別小家を建て、別火に飲食等致させ、十二日の時間を日数と唱え候に付き、世俗……通言（普通に行われている）に御座候、その他猪鹿肉食等一切禁止忌み、その内病者薬用に獣肉等相用候節は、別家別火にて七十五日の間遠慮致させ候弊習これ有り候ところ、今般御趣意にて……御廃止に相成り申し候」（打上村）

* 古老の申し伝えによると、秋葉の神、氏神の氏子であるから穢れにふれないよう、婦人の経水（月のさわり）の時は、12日間を別家・別火で飲食させていた。これは世俗一般に行われていた。他に肉食は一切禁止、薬用に用いる時は、75日の間、別家・別火にする弊習があったと述べてますが、いつ頃まであったのかは未調査です。



「連日日待と唱え、村組を立て…信心の名義を呼称し、その実、終夜雑説等仕り終には不善を醸し、時として奕道等に紛れ込みその風儀宜しからず、かつ又隔月に庚申待と唱え、これ又組を立て、飯料等銘々持ち寄り抽選致し、施主に当たり候者は膳部を調べ、喫飯致させ、庚申梵天を拝し、それより前同様の所行に及ばせ候、これ又不良の儀につき、いずれも相廃止したく存じ奉り候事」（寺島新田村）

* 寺島村と同様、日待や庚申待の様子が述べられ、うわさ話や博奕ばくちに入り込み、不良として廃止したいとしています。

各村取纏帳（寺島新田村）の一部

（国立公文書館デジタルアーカイブより）

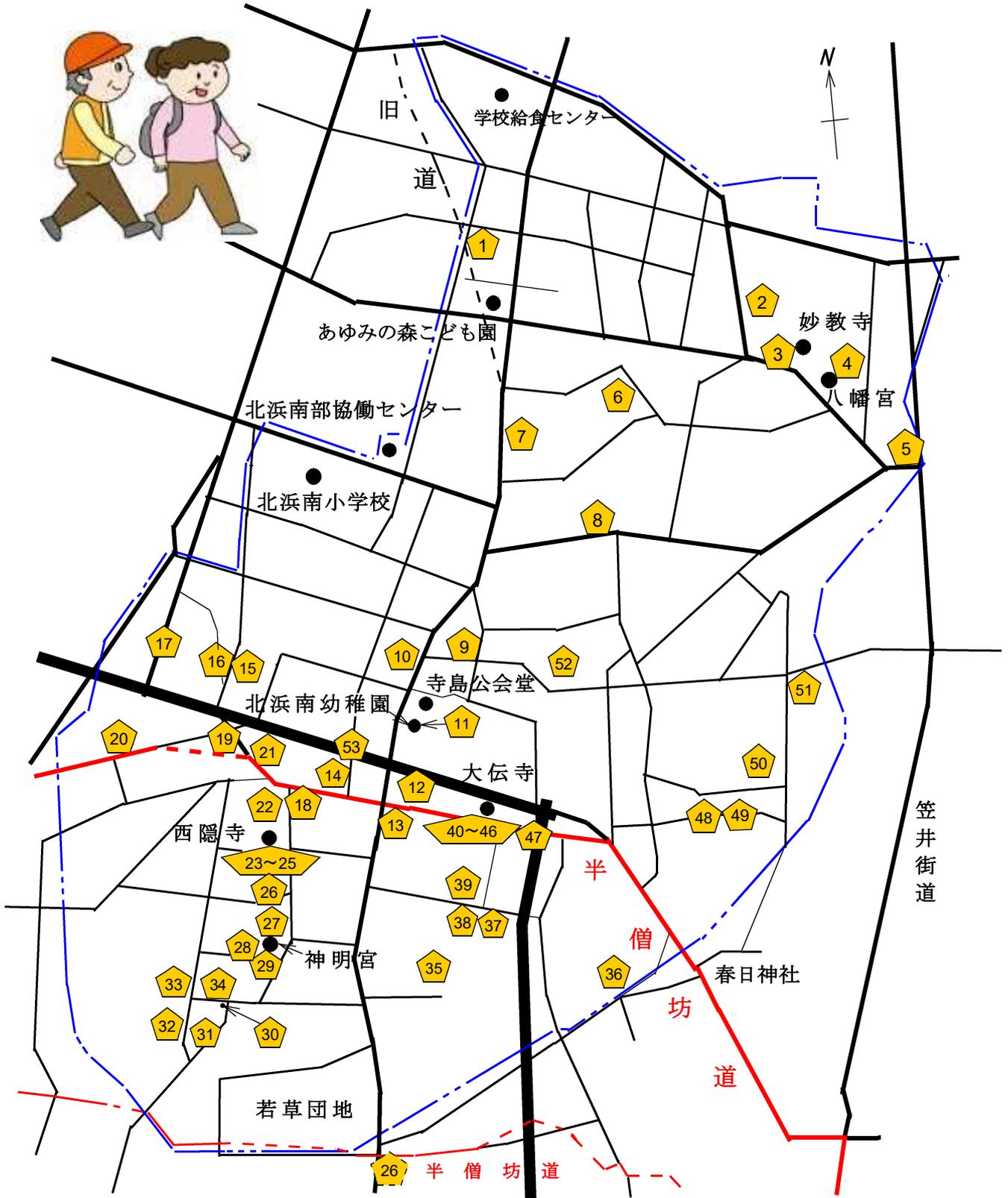
回覧

寺島歴史マップ

「寺島の歴史を探る」

その40 令和4年9月1日

40号記念として、歴史マップにまとめました。



- 1 **神明社内宮跡 (字富永)**
平安時代後期に美蘭御厨みそのみくりやを守護する神社として伊勢神宮より勧請されたと推定される。朱印5石6斗。明治以前の神官は花井文右衛門家。明治7年神明宮に合祀。
- 2 **馬頭観音 私**
大正7年、石間家の馬の供養のため建立。
- 3 **圓詔山妙教寺**
天正元年創立の日蓮宗寺院。了雲院にっとう日登上人開基。本尊日蓮聖人。七面堂の七面大明神(七面天女)が女性の信仰を集めた。七面天女の伝説が伝えられている。
- 4 **八幡宮・庄園の松**
祭神菅田別命。元は妙教寺の鎮守。境内にあった黒松は国の天然記念物で樹齢385年。かつては「明神松」と呼ばれた。現在、根株が松霊明神として祀られる。
- 5 **伊豆石の住宅と倉 (棕本家) 私**
伊豆石の住宅兼店舗は大正12年建築。伊豆石の倉は昭和11年、大瀬から移築。
- 6 **伊豆石の倉 (花井家) 私**
明治終わり頃建築。藍染め用の倉として使用。隣に藍染めの作業場があった。
- 7 **龍燈 (北新田)**
昭和32年建築。灯籠はないが、瓦製の灯籠台のみが残されている。
- 8 **浅間神社跡**
富士の浅間神社の神官を務めた花井文右衛門家が勧請したという。大正4年、神明宮に合祀。跡地は浅間公園となる。
- 9 **馬頭観音 私**
旅人の馬が付近で亡くなり、供養のため建てられたという。風化が進んでいる。
- 10 **秋葉山常夜灯 (清水)**
明治37年8月建立。平成18年道路拡幅の時、移転改築。1月に幟を立てる。
- 11 **寺島尋常小学校跡**
明治21年、校舎が新築され、大伝寺より移転。明治25年寺島尋常小学校として独立。明治41年、横須賀に北浜尋常小学校が設置されるまで続く。江戸時代には椿薬師(現在西隠寺境内)があった。

- 12 **天神社跡 私**
祭神は菅原道真(学問の神)。明治以前の社守は辻治平。明治7年、神明宮に合祀。
- 13 **十王堂跡 私**
江戸時代の天保14年以前の村絵図によると、四つ角南東に十王堂があった。現在の西隠寺十王堂との関連が予想される。
- 14 **秋葉山常夜灯 (本田)**
明治20年11月建立。石工は浜松紺屋町の佐藤善三郎。もと山下商店角にあった。
- 15 **馬頭観音 私**
「馬頭観世音」と刻まれる。昭和16年頃、袴田氏が事故死の馬を供養するため建立。
- 16 **龍燈と秋葉山常夜灯 (山王)**
内山氏宅角より昭和3年、さらに昭和63年に現在地に移転改築。常夜灯は、明和5年(1768)11月建立。市認定文化財「あきは山」と記された灯明箱が残る。
- 17 **山王権現社 (日吉神社) 跡**
明治以前の神官は袴田多左衛門家。朱印4石8斗の寄進を受けた。明治7年、神明宮に合祀。家光から9代の朱印状写しが残る。
- 18 **半僧坊里程石 (五里十五丁) 私**
奥山方広寺の鎮守、半僧坊への参拝者のために道のりを示した。明治18年頃の建立。「五里十五丁」、袴田氏の名が刻まれる。
(以下、全4基とも市認定文化財)
- 19 **半僧坊里程石 (四丁) 私**
もと40m南の袴田氏宅前の旧道角にあった。文字が半分程欠損。五里十四丁か。
- 20 **半僧坊里程石 (二丁) 私**
市川氏宅前付近に倒れていたが、再建された。上部が欠損。側面に大村武平氏・中安吉平氏の名がある。五里十二丁か。
- 21 **伊豆石の倉 (市川家) 私**
昭和3年、市川利一郎氏が建築。㊦の軒瓦。戦前綿織物業の倉として使用。
- 22 **西隠寺18世原田頑翁石の墓 私**
頑翁石は江戸から明治にかけての西隠寺中興、質素に努め励み、徳が高く人望あり。天皇より紫衣を賜る。明治9年示寂、19世石翁が頑翁石の事績を刻んだ墓を建立。

23 松源山西隠寺 しょうげんざん

臨濟宗方広寺派の寺院。南北朝時代の永徳元年（1381）奥山三生院二世暘谷玄輝和尚開山。本尊釈迦牟尼仏。將軍より朱印6石2斗の寄進を受ける。明治18年焼失、19年本堂再建。平成27年本堂改築。鎮守は摩利支尊天。

24 椿薬師如来（市認定文化財）

江戸時代の遠江国風土記伝に「椿一株を靈木となす 御体は石なり」と記される。薬壺を持つ。病を治し寿命を延ばす御利益がある。元禄・宝永頃（1700年頃）の9世黙源和尚の造立。

25 大乘妙典千部供養塔

享保12年（1727）10世瑞龍和尚が、大乘妙典を千回読誦した記念に建立。宝篋印塔等の部材で建て直されている。石仏群の左右両端に、門前・東新田から移された馬頭観音と言われる2体がある。

26 半僧坊里程石（五里十〇〇） 私

袴田氏の庭にある。もと笠井より西ヶ崎を通る半僧坊道で、若草団地南端東、袴田氏の土地の角にあった。下部が欠損。

27 神明宮（もと神明社外宮） *宮東遺跡

平安時代後期に美藪御厨を守護する神社として伊勢神宮より勧請されたと推定される。朱印5石6斗を受ける。明治以前の神官は花井文右衛門家。明治7年に内宮・外宮・他社を合祀し、主祭神は天照大神。昭和37～38年本殿・拝殿改築。

*神明宮周辺は、鎌倉時代の山茶碗等の破片が散見する宮東遺跡となっている。

28 日清日露戦捷記念碑・忠魂碑 せんしやう

明治27年の日清戦争、37年の日露戦争の勝利を記念した記念碑（従軍者32名）と日露戦争の戦没者（6名）を慰霊する忠魂碑。明治44年建立。

29 龍燈（間渡）

昭和38年、神明宮東入口より移転・改築。天保13年（1842）の棟札がある。法主は修験者全學院良慶（永安寺住職）。瓦製灯籠と灯明箱が残る。

30 馬頭観音 私

馬頭観音ではないかというが不明。側面に「念仏供養」の文字が刻まれる。上部欠損。7～80年前にはあったという。

31 馬頭観音 私

中安氏の曾祖父が馬を飼い、祖父が「馬勝っちゃ」と呼ばれ、馬の子を育てた。昭和18年、馬の供養のため建立した。

32 土蔵（大村家） 私

建築年は不明。雨樋受けの折れ釘が大きく飾りとなる。

33 土蔵（中安家） 私

大正～昭和の初め、中安時十郎氏が建築。米などを貯蔵。忠一氏の神明宮梵天が残る。

34 土蔵（源馬家） 私

大正～昭和の初め、中安時十郎氏が建築という。正面腰は、なまこ壁。

35 伝東光寺跡 私

本田の大村氏がかつて南崎で染め物屋を営んでいたが、東光寺が付近にあり、転居後も「東光寺」の屋号で呼ばれた。

36 八幡宮跡 はんだわげのみこと

祭神菅田別命。明治7年、神明宮に合祀。

37 牛頭天王社（八坂神社）跡 ごすてんのう

疫病を司る神（後に須佐男命とされる）で、疫病除けの御利益があるとされる。明治7年、神明宮に合祀。

38 地蔵菩薩

光背に「安政六未年 願主申年男」（1859）と刻まれる。笠井上村の地蔵と二体呼応して行ったり来たりしたという。

39 土蔵（中安家）（市認定文化財） 私

大正10年建築の最大級の土蔵。唐破風の瓦葺きひさは、昭和6年建築。七福神の瓦像が載る。棟梁は共に中安時十郎氏。大正時代から中の屋号で織物業を営む。

40 長富山大伝寺 ちやうふざん

臨濟宗方広寺派の寺院。鎌倉時代の宝治2年（1248）、法燈圓明国師大和尚開山。阿弥陀堂として開創。文禄2年（1593）方広寺末となる。本尊阿弥陀如来。100年に一度の開帳。將軍より朱印3石5斗の

寄進を受ける。明治35年本堂建築。

41 木舟新田学校寺島分校・寺島学校跡

明治6年木舟新田学校が長泉寺に開校し、同7年寺島分校が大伝寺に開校。同10年寺島学校として独立。その後、校名が変わりながら同21年、新校舎が旧公会堂の地に建設されるまで、大伝寺で授業が行われた。

42 寺島の道祖神 (市認定文化財)

舟形に彫られた中に2体の像が肩や腕を組む姿。村の魔除け、行路の安全、子孫繁栄を願う。道標を兼ね「左 平口不どう」とある。もと東の三叉路にあった。

43 弘法大師像 (市認定文化財)

文化13年(1816)頃始まった新四国八十八か所巡りの88番札所。江戸時代流行した弘法大師(空海)ゆかりの地巡りになぞらえた小さな巡礼が行われた。

44 渥美知新翁句碑

温古堂渥美知新(渥美代助)は松島十湖に俳句を学び、宗匠となる。「すらすらと 月は昇りて 水の中」の句が刻まれる。十湖門人等により昭和30年10月建立。

45 水野久平の碑

三河生まれの久平は、明治20年笠井上村に来て、織機の改良・発明考案をし、遠州織物の品質向上発展に寄与、「機具久さ」と呼ばれた。高柳遠市などの弟子たちにより昭和9年3月に建立。

46 聖観音・西国三十三観音供養像

台座に、15世空萬石和尚が、宝暦12年(1762)大般若経真読満願と西国三十三観音を集め供養したことが刻まれている。16世龍水蓮和尚が造立。当時のものか不明だが、本堂に観音堂から移された三十三観音が安置されている。

47 二六信用銀行跡

明治33年、源馬房次郎氏・花井要一郎氏等が二六合資会社を設立。その後、明治38年3月に資本金10万円・株券額50円で二六信用銀行を設立、昭和4年5月まで営業した。

48 牛頭様(牛頭天王)

神仏混合の疫病除けの神。社内に9枚の棟札が残されている。古くは約200年前から東新田の氏子により祀られている。法主に永安寺住職でもある修験者の全學院良慶の名の棟札がある。

49 龍燈(東新田)

平成4年建立。もと永安寺付近にあったが、明治初めに移転。灯籠はない。牛頭様と共に1月に龍燈祭りを行っている。

50 永安寺跡 私

真言宗の修験道寺院で檀家はない。創建は不明。江戸時代終わりの住職である全學院良慶は、村内外の祭祀や祈祷を行った。大正10年頃台風のため倒壊し廃寺。最後の住職は石神寛三郎氏(良寛)。

51 馬頭観音 私

市川氏宅内の裏に安置。明治時代に飼っていた馬が火事で亡くなり、供養のため造立。もと北裏の道角にあった。

52 中安家の主屋 私

江戸時代に庄屋を務めた中安家の分家。明治24年建築。家人の使う通用口の他に、客人を送迎する式台玄関と部屋が設けられている。土間の一部は取り除かれている。隣の本家跡にレンガ造りの倉と門が残る。

53 寺島天神遺跡

道路建設に伴い、戦国から江戸時代の陶器破片が多く見つかっている。



* 私 私有地に入って見学する場合は許可を得てください。

* 詳しい説明は、冊子または HP ホームページ「寺島の歴史を探る」を参照。

寺島歴史マップ

作成 太田隆雄(寺島7班)

TEL 053-587-3063

発行 令和4年9月1日

寺島の神明社（内宮と外宮）

江戸時代の寺島には、神明社（内宮）・神明社（外宮）・山王権現社・牛頭天王社・天神社・浅間社・八幡社の7つの神社がありました。（寺島の歴史を探る」その2参照）

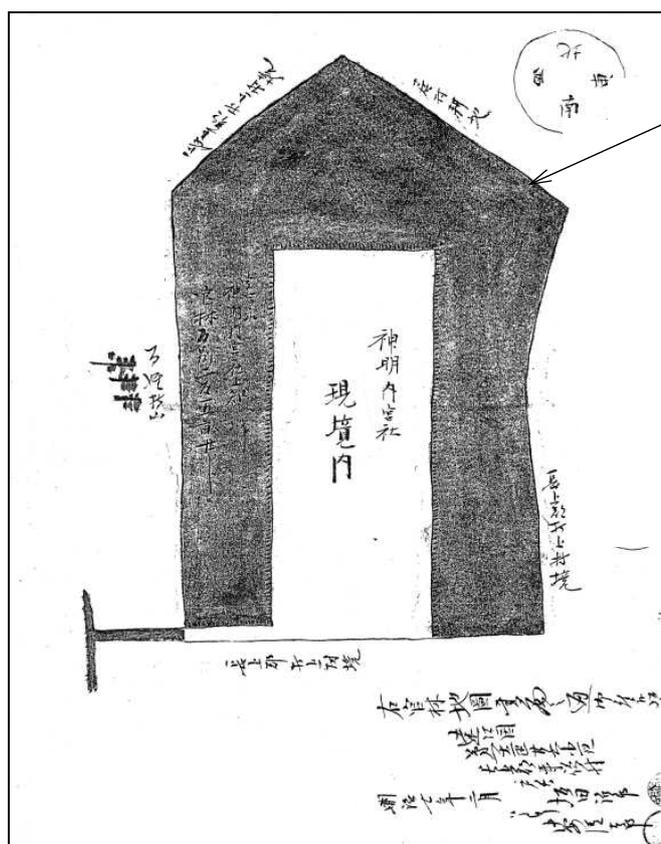
寺島の神明社は、平安時代終わりに成立していた美蘭御厨（寺島を含む伊勢神宮の領地荘園）を守護する神社として、伊勢神宮より勸請された神社と推定されています。

明治の初めに神仏分離により権現・天王の名は禁止され、山王権現社は日枝神社、牛頭天王社は八坂神社になりました。7社の祭神は、現在全て神明宮に合祀されています。

寺島東の八幡神社は、かつて妙教寺の鎮守でしたが、明治時代に分離しています。

明治の初め、上知令により、神社は祭事に必要な部分を除いた境内や境内以外も国に召し上げられていましたが、合祀後の神明宮は、境内地以外は明治の終わりに払い下げ、境内地は大正に無償貸し付け、昭和24年に譲与されました。現在、内宮跡は住宅地となり、外宮跡は神明宮となっています。今回は、内宮・外宮跡を確認してみたいと思います。

○神明社（内宮） 祭神 あまてらすおおみかみ 天照大御神 字富永



官林(官有地)

明治7年2月「社寺官林地略図面」より

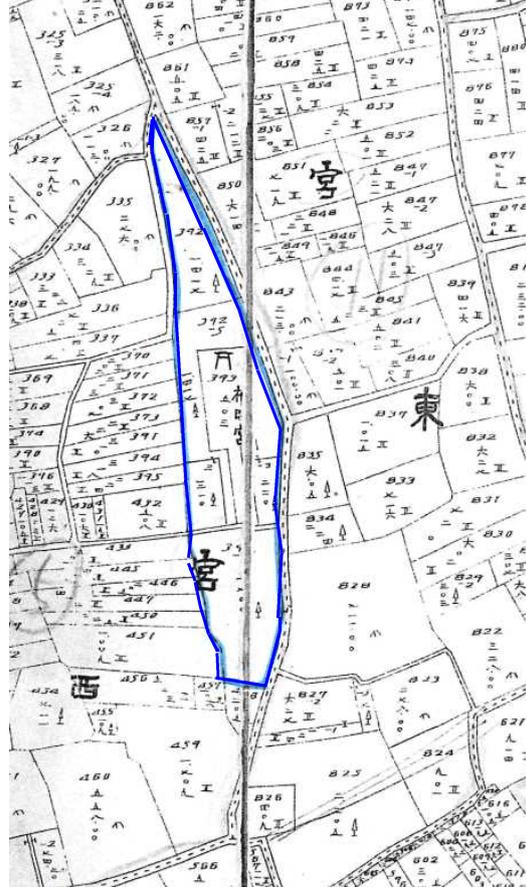
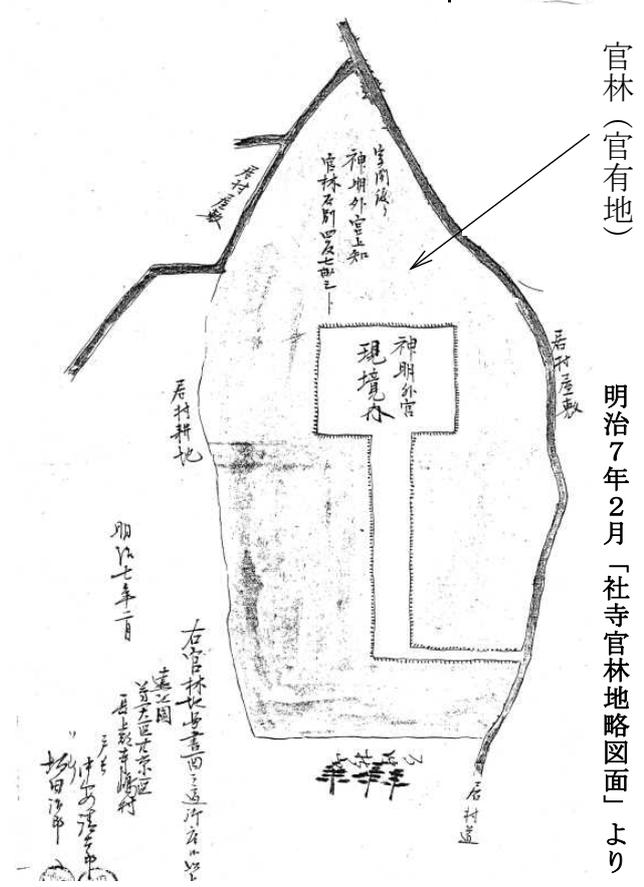


★境内地 5畝14歩(541㎡) ★官林 2反5畝20歩(2544㎡) ★祭礼 正月16日

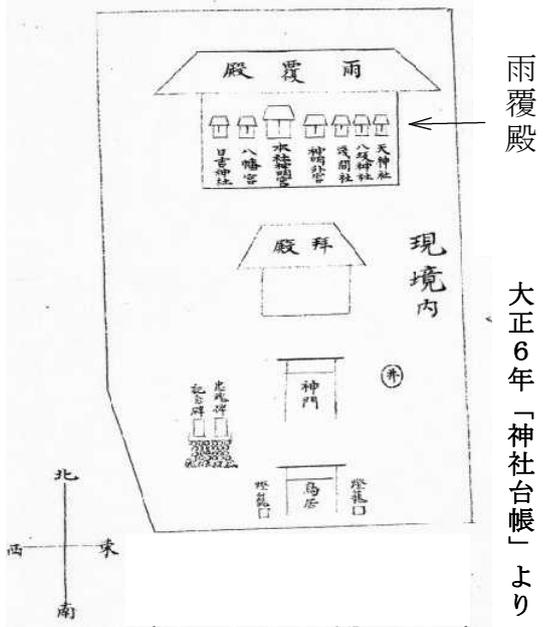
★本社 桁間3尺4寸(103cm)梁間2尺7寸4歩(94cm) ★鳥居高さ1丈(3m) ★幟2本

★明治8年の各村取纏帳には、古老の言い伝えとして、字富永の神明社は富永様といい、美蘭村の富永氏が毎年1月1日の暁に必ず参拝したという。富永氏は神明内外両社を祀った人ではないかと、記されています。廃された社跡の林は富永山と言われていました。

○神明社（外宮） 祭神 とようけひめのみこと 豊受比賣命 字間渡（宮西）（神明宮の地）



★境内地 4畝16歩(449㎡) ★官林 4反7畝3歩(4670㎡) ★祭礼 9月16日
 ★本社 桁間4尺4寸(133cm)梁間3尺7寸(112cm) *内宮よりやや大きい社
 ★拝殿 桁間3間(5.5m)梁間2間(3.6m) ★鳥居高さ1丈2寸(3.1m) ★幟2本
 ★氏子 120軒 *寺島の中心地として氏子が増え、拝殿もできて、内宮より崇敬されてきたようだ。



○合祀後の神明宮 主祭神 天照大御神

寺島の各社が、明治7年（浅間社は大正4年）外宮の地に合祀され、神明宮となりました。その時、内宮と外宮の社を入れ替え、大きな外宮の社に天照大御神を遷座し、内宮としたと思われます。その後、各社は、建てられた間口5間の茅葺き屋根の大きな雨覆殿あまおいでんに内宮・外宮を中央にして置かれました。大正6年の境内には元外宮の拝殿、鳥居のほか、神門があり、日清日露戦捷記念碑・忠魂碑がありました。大正13年には旧社務所が新築されました。

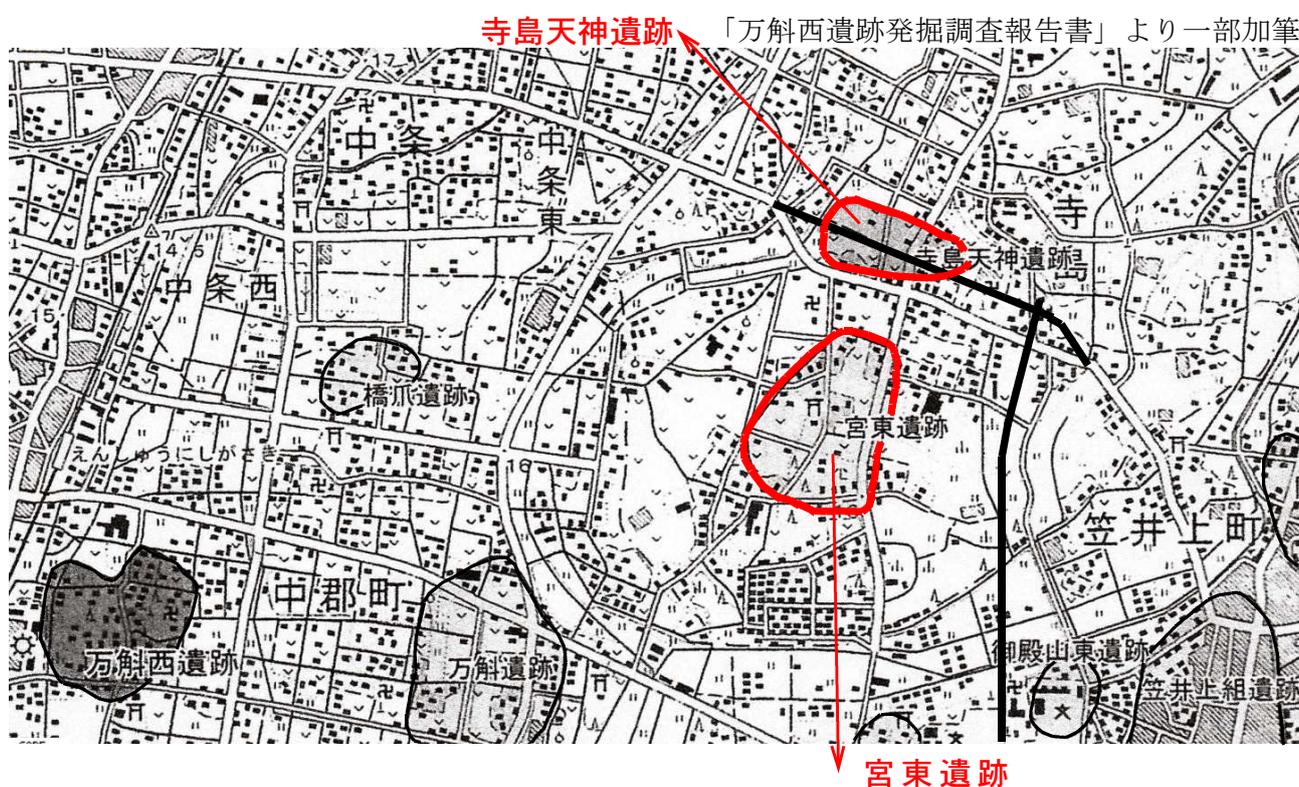
昭和37年に本殿、38年に拝殿が改築され、平成29年9月に新社務所が完成しました。

<その他の参考> 明治6年4月取り調べ（神明宮文書）・明治8年1月社寺境内外上知区分絵図面取纏入・明治21年寺島全村地図・神明会館完成記念誌「神明宮の歴史」氏子配布済み（旧拝殿・雨覆殿・旧社務所棟札等の写真あり）

寺島の宮東遺跡と寺島天神遺跡

天竜川が改修される以前は、平野部は度々の川の氾濫により流路も変わり、あちらこちらに支流が広がっていました。砂や石が堆積した微高地（少し高い所）が島のようにでき、そこに人々が住み、耕地が開拓され集落ができました。寺島の名前の由来ともなっています。（「寺島周辺の河川の跡図（太田作成）」は「寺島の歴史を探る」その1を参照）

そのような場所に人々の営みの跡が発見されます。寺島の中にも遺物が発見された2つの遺跡があり、市によって登録されています。



○^{みやひがし}宮東遺跡（平成25年登録）

神明宮の周辺の畑などの表土に、平安時代終わりから鎌倉時代の「山茶碗」や室町時代から江戸時代初めの「かわらけ」「内耳鍋」など、庶民が日常使った雑器の小破片が散見しています。畑の50cm程深い所からは、古い山茶碗が採集（中安洪弑氏）されています。

山茶碗は、東海地方で製作された釉薬のかからない陶器の碗です。かわらけは素焼きの皿、内耳鍋は、内側に輪が付いていて火の上でつるして使う素焼きの鍋です。

神明社（後の神明宮）に関わる美菌御厨との関係は、まだ不明ですが、美菌御厨が存続した時代（平安時代終わり頃～室町時代初め頃）と重なる遺物（山茶碗）が多いとい

う傾向が見られます。その頃には人々が集落を作り、神明社周辺で生活していたことを示しています。

また、わずかですが、古代の奈良時代から平安時代初め頃の須恵器すえきの小片、平安時代の灰釉陶器かいゆうとうきの小片も見つかっています。



宮東遺跡で見つかった山茶碗の小片
(採集 中安・太田)



19



19

参考例 万斛西遺跡から出土した山茶碗
「万斛西遺跡発掘調査報告書」より

○寺島天神遺跡 (平成26年度登録)

小松から笠井へ向かう道路の建設に伴い、調査が行われました。この遺跡では、自身が廻ってみると、戦国時代から江戸時代にわたる土器の小片が散見されます。

この地も微高地であり、小松と笠井を繋ぐ地であることから、あたりに集落が広がっていたと思われます。



(採集 太田)

近くでは笠井地区や積志地区にも、天竜川の支流に挟まれた微高地に遺跡が存在します。笠井地区では、古墳時代の集落跡、奈良・平安時代の遺物、遺構が発見され、官衙かんが(郡役所)に関係し、都市的な様相を示し、内野から匂坂に通じる古代の東西交通の要衝地としての性格をもっているといえます。

積志地区では、中世の居館(やかた)が存在したと想定されていて、鎌倉時代の山茶碗なども多数採集されています。

寺島は、笠井地区や積志地区という要衝の隣接地であり、その影響を受けながら集落が発達してきたのではないかと思います。

*参考 「万斛西遺跡発掘調査報告」「笠井西浦遺跡発掘調査報告」「浜松市文化財分布図」
(浜松市・浜松市教育委員会)

浜北文化協会郷土史部による 龍燈・秋葉山常夜灯の調査と展示

江戸時代の中頃より、秋葉山の火伏せの神への信仰が盛んになり、各地に秋葉山常夜灯や龍燈が建てられました。現在までその信仰が続いてきました。

しかし、浜北区には、龍燈・秋葉山常夜灯は、現在100基以上が残されていますが、地区での状況により、やむを得ず廃止したり、取り壊ししたりする所もあります。

幸い、寺島地区では隣保がまとまり、伝統を大切に作る意識が高く、龍燈・秋葉山常夜灯、祭事も維持継承されています。しかし、将来どのようなようになるか、安心はできません。

そのため、現在までの状況を記録することは、先人たちが何を思い願ったか、先人たちが残した貴重な文化財と伝統をどう後世につないでいくか考えるために大切なことです。

浜北文化協会郷土史部では、これまで「先人たちの心をたどる」シリーズとして、浜北区域の路傍の神仏と道標・寺社・龍燈・秋葉山常夜灯の調査と展示報告を行っています。

令和2年度・3年度には、浜名・北浜の各地区の龍燈・秋葉山常夜灯についての調査と展示報告が行われました。4年度以降には、中瀬・赤佐・亀玉地区の調査と展示報告が行われます。

今号と次号では、寺島の龍燈・秋葉山常夜灯の調査をまとめた展示配付資料を紹介します。

- その43では、 No.16 山王組
No.17 間渡・門前西組
No.18 本田組
- その44では、 No.19 清水組
No.20 北新田組
No.21 東新田組

*これまでの配付資料「浜名・寺島地区」・「北浜地区」を希望の方は、太田まで連絡をしてください。
(郷土史部会員 寺島 太田 TEL587-3063)

*浜北文化協会郷土史部の紹介

郷土史部は浜北文化協会の所属団体として、会員同士で親睦を図りながら、主に浜北地区の郷土の歴史についての学習や調査などを行っています。

浜北文化センターの市民ミュージアム浜北で、毎月第一水曜日を定例会とし、その他に調査などの日を決めて活動しています。調査した事をまとめ、展示発表・資料配付・冊子作成販売も行っています。会員は現在14名。会員募集もしています。

令和2年度には、浜松市教育文化奨励賞（地域文化賞）を受賞しました。

秋葉山と秋葉信仰

現在、秋葉山には、山頂近くに「秋葉山本宮秋葉神社」、少し下った所に「秋葉山秋葉寺・秋葉三尺坊大権現」^{しゅうようじ}があって、信仰の山として多くの参詣者が訪れています。

しかし、江戸時代終わりまでは、現在の秋葉神社の場所に「大登山秋葉寺・御本社(秋葉三尺坊大権現)」があり、秋葉信仰の総拠点となっていました。(大登山は前の山号)

秋葉信仰の神は、秋葉山の山岳信仰と修験道が融合した神仏習合の神で、中世の鎌倉時代以降に「秋葉大権現」とも、「秋葉三尺坊大権現」とも言われ、その靈験への信仰が高まっていったと言われています。

江戸時代中ごろ以降になると、火災への怖れから「秋葉大権現」「秋葉三尺坊大権現」は火防の神として信仰が急速に広まり、各地に「講」の組織が作られるようになりました。そして、お札を受けるために秋葉道者となって秋葉山へ代参をしました。こうして、秋葉信仰は全国的に広がり、盛んになっていきました。

明治時代になり、神仏分離政策により秋葉寺は廃寺となり、山頂近くには秋葉神社の火之加具土大神ほのかぐつちのおおかみが祀られましたが、後に秋葉寺・秋葉三尺坊大権現も現在地に再興されて、それぞれ火防の神として信仰されています。また、共に毎年12月15・16日には「火祭り」が行われます。

龍燈と秋葉山常夜灯

江戸時代の中頃から秋葉山へ参詣する人々の道しるべとして、各地の秋葉道や村の辻には秋葉山常夜灯が建てられ、江戸時代の終わり頃には、雨よけの鞆堂さやどうも建てられるようになりました。鞆堂は浜北地域では「龍燈」と呼んでいます。彫刻や組み物などに手の込んだ龍燈も見られます。龍燈の名の由来は、火と水、天竜川の竜神・水神信仰との関わりなどがあるとも言われています。

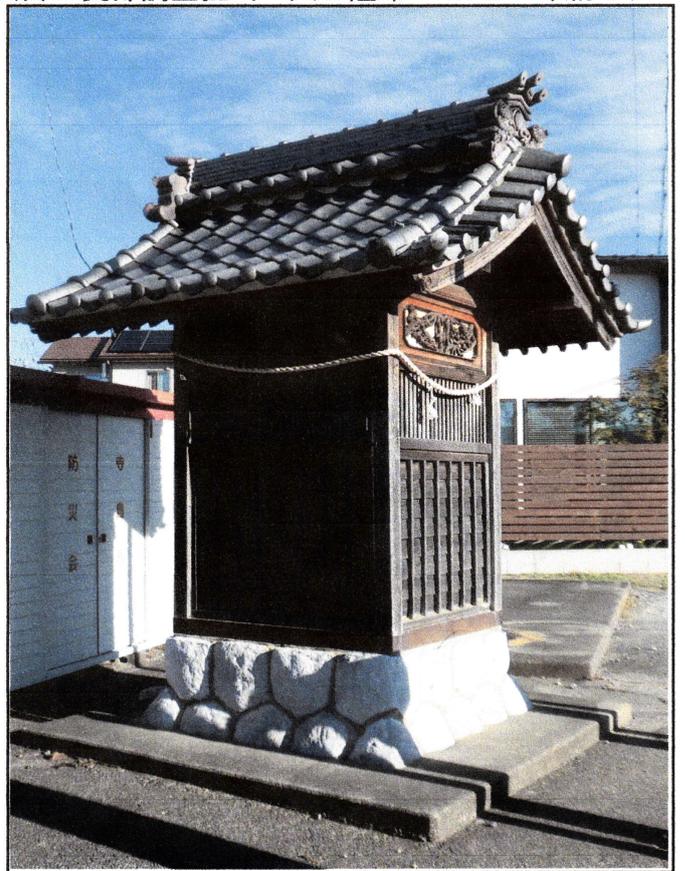
昔は、龍燈や秋葉山常夜灯には、毎晩当番で灯明皿の油に火を灯したり、ろうそくに火をつけたりしていましたが、大正時代以後は、電灯に変わっていきました。また、道路拡幅などで、神社・寺院の境内や他の場所に移転したものがあり、道しるべの役割が薄くなりました。現在も、龍燈や秋葉山常夜灯では、毎年秋葉山のお札を納めたり、幟を揚げ、村の安全を祈る祭りが行われたりしている所が多くあります。

龍燈や秋葉山常夜灯は、浜北区には現在100基以上が残されていますが、やむを得ず廃止してしまう所も見られます。貴重な文化財として保存されることが望まれます。

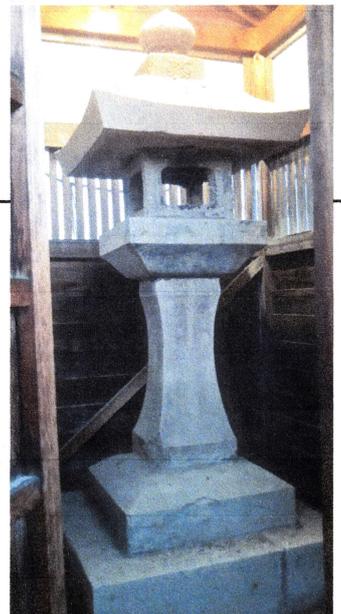
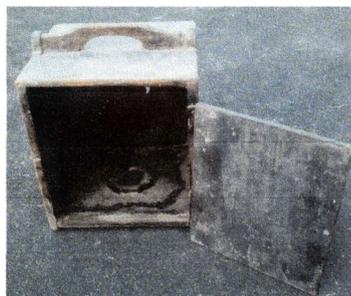
展示・資料に使用している地図は、浜松市長の承認を得て同市発行の地形図を使用し、複製したものです。(承認番号 浜都計第65号)

○寺島の龍燈・秋葉山常夜灯（浜北文化協会郷土史部調査担当 太田隆雄 R3.6.11改訂2）

No.	16
設置場所	寺島 北浜南小の南
管理団体	寺島南（1～3班）山王組



形式	龍燈（切妻造り）	内部	常夜灯（石灯籠）
文字等	常夜灯 「秋葉山夜燈」 「寺嶋村郷中」 つちのえね 「明和五年戊子霜月吉祥日」（1768） 笠の上部に社紋「花剣菱」の浮き彫り 幟立て 「奉」「納」 昭和63年4月の各班の寄附人名板 他に昭和2年9月3日の喜捨（寄附）人名簿「源馬房治郎（他19名）」あり		
建立年	龍燈 昭和63年4月 常夜灯 明和5年11月（1768）		
お祭り等	当番（各班長）により、1月28日か前の日曜日に幟を揚げ、しめ縄を張り、供物を供えて祭典を行う。祭典後、餅投げを行う。 正月と9月の神明宮例大祭にも幟を揚げる。 御札は、町内会役員が秋葉神社上社に代参していただき、当番が龍燈内に祀っている。		
その他	龍燈は、道路拡張のため①（内山氏宅角付近）より昭和3年②と昭和63年③に移転し、改築された。常夜灯は、浜北区内で最も古い（明和5年）常夜灯3基の内の一つである。昭和20年代までは、ろうそくで火を灯していた。龍燈内に灯明箱が残されている。扉には「あきは山」の文字の形に小さい穴が開けられている。		



No.	17
設置場所	寺島 神明宮南
管理団体	寺島南（4～7班） 門前西・間渡組



形式	龍燈（切妻造り）	内部	常夜灯（瓦製灯籠）
文字等	(1) 旧龍燈棟札 表「奉造立秋葉山龍燈一字 天下泰平 国土安全」 「天保十三年寅正月吉日 工匠 小栗政吉」（1842） 裏「法主 全学院 良慶」		
	(2) 現龍燈棟札 表「奉上棟秋葉龍燈改築壹宇 （4守護神名）」 裏「昭和三十八年八月吉日 上棟祭執行」 「世話人大村嘉平（他5名）（改築理由も記されている）」 「大工棟梁 竹内弘 彫工 中安忠一」		
	幟箱 「秋葉神社幟箱 昭和十年二月」 以前に使用した幟「奉献正一位秋葉神社 昭和五十九年九月吉日 組内安全」		
建立年	龍燈 昭和38年8月 旧龍燈 天保13年正月（1842）		
お祭り等	お札は町内会役員が秋葉神社上社に代参していただき、当番が龍燈に祀る。各班の当番により各戸に寄付を募り、1月28日か前の日曜日に幟を揚げ、しめ縄を張り、供物を供えて祭典を行う。祭典後、餅投げと各戸へ餅配りをする。正月、9月の神明宮例大祭の時にも幟を揚げる。		
その他	龍燈内に、瓦製灯籠と灯明箱が残されている。 (2) (1) 灯明箱の扉に「秋葉神社」と朱書きされ「村中安全」と記されている。中に灯明皿3枚もある。 旧龍燈は神明宮東入口①にあり、②に移転した。 現龍燈棟札には、 「旧宇は老朽化のため、神明宮改築と共に移改築す」と記されている。		



No.	18
設置場所	寺島 北浜南幼稚園南西
管理団体	寺島南（8～10班）本田組



形式	常夜灯（石灯籠）		
文字等	<p>常夜灯 「秋葉山常夜燈」 「郷中安全」 「明治廿年十一月建立 寺嶋村」（1887） 「濱松紺屋町 石工 佐藤善三郎」</p> <p>幟立て 「郷中安全」 「大正十二年二月建之」</p>		
建立年	明治20年11月（1887）		
お祭り等	<p>祭典は当番の班により、1月28日に近い前の日曜日に幟を揚げ、四方竹・しめ縄を張り、供物を供えて拝礼する。祭典後、餅投げを行う。 正月と9月の神明宮例大祭の時にも幟を揚げる。 御札は、町内会役員が秋葉神社上社に代参していただき、当番が常夜灯に祀っている。</p>		
その他	<p>常夜灯は、もと山下商店の交差点角①にあり、道路拡張により馬淵氏宅前②に移転し、さらに昭和35年ころ現在地③に移転した。</p>		

浜北文化協会郷土史部による 龍燈・秋葉山常夜灯の調査と展示（2）

前号に続き、寺島の龍燈・秋葉山常夜灯の調査をまとめた展示配付資料を紹介します。

No. 19 清水組

No. 20 北新田組

No. 21 東新田組

久々の「寺島歴史めぐり」を実施しました

本年度、10月15日（土）に寺島自治会（南・北・若草町内会）と育成会行事として「寺島歴史めぐり」が行われました。寺島歴史めぐりは、平成28年度・30年度に有志で行って以来、台風やコロナの流行で実施できませんでしたので、久々の歴史めぐりとなり、子供や役員・ひまわりの会を含めて47人が参加しました。

今回は2時間半かけて寺島南の約3kmをめぐり、龍燈・半僧坊里程石・椿薬師・神明宮・土蔵・道祖神など、解説を聞きながら見学して、寺島の歴史や先人たちの思いや願いに触れてもらうことができました。今後も、このような機会を設け、多くの方々に寺島の歴史に関心をもっていただくようにしたいと考えています。



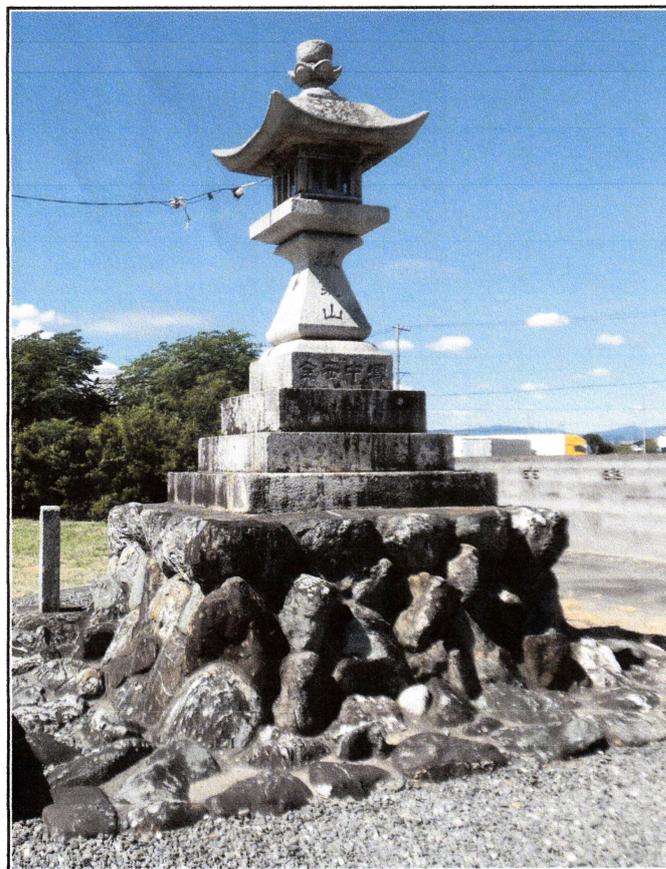
新四国八十八所巡り 88番の弘法大師
寺島を守る道祖神 夫婦円満と子孫繁栄も



寺島歴史めぐり 2022, 10, 15

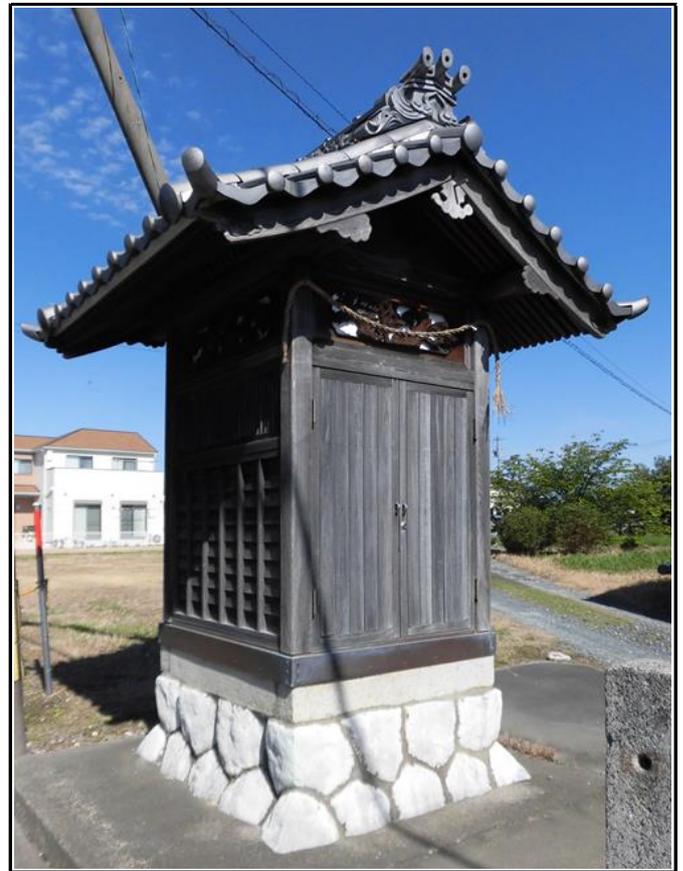
完歩して記念写真
コロナに負けないように、西隠寺の椿薬師もお参り

No.	19
設置場所	寺島 寺島公会堂北
管理団体	寺島北 (11~13, 17班) 清水組



形式	常夜灯 (石灯籠)		
文字等	常夜灯 「秋葉山」「郷中安全」 「明治三十七年八月建之」 幟立て 「大正五年一月建之」 一本は後の再建 (文字は無し) 改築の石碑 「竜灯改築篤志寄付者名 ……」 「平成18年12月23日」		
建立年	明治37年8月 平成18年12月改築		
お祭り等	御札は、町内会の役員が秋葉神社上社に代参していただき、当番が常夜灯に祀っている。 当番の班により、1月28日か前日から幟を揚げる。 現在は祭典は行っていない。 正月と9月の神明宮例大祭の時にも幟を揚げる。		
その他	平成18年に道路拡幅のため少し西に移築し、新しく石を敷いた。また、改築の碑を建て、石のベンチを置いた。自然石の基壇の上に、大きな常夜灯が建てられている。 中安清雄家文書 (市民ミュージアム浜北所蔵) に、明治37年建築の関係文書が残されている。		

No.	20
設置場所	寺島 北浜南部協働センター東
管理団体	寺島北（14～16班） 北新田浅間・北新田北組



形式	龍燈（切妻造り）	内部	常夜灯（灯籠は無し）
文字等	棟札①表 「奉獻秋葉神社 昭和三十二年十月吉日 願主當北新田□組中 大工棟梁当所山王 市川 敏 □□□人浜北町根堅 内藤 進」 裏 「浜北町高畑 宮地壽恵雄謹誌」 棟札②表 「奉獻秋葉神社 平成二年一月吉日 願主當北新田組中 大工棟梁 （有）大瀬住宅 清水国芳」 裏 「浜北市寺島 渥美金一郎謹誌」 幟立て 「大正八年十月建之」		
建立年	平成2年1月 旧龍燈 昭和32年10月		
お祭り等	当番（各班長）により、1月28日か前の日曜日に幟を揚げ、しめ縄を張り、供物を供えて祭典を行う。祭典後、餅投げを行う。 正月と9月の神明宮例大祭の時にも幟を揚げる。 御札は、町内会役員が秋葉神社上社に代参していただき、当番が龍燈内に祀っている。		
その他	文政13年（1830）の棟札があったと伝えられる。龍燈内に、灯籠台と思われる瓦製の台、鉦と撞木が残されている。 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   <div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-around; width: 100%;"> ① ② </div>  </div> </div>		

No.	21
設置場所	寺島 名倉商店東
管理団体	寺島北（18～23班）東新田組



形式	龍燈（切妻造り）	内部	常夜灯（灯籠は無し）
文字等	龍燈棟札 「浜松市西山町…… 上棟式 平成四年二月二十六日 定（完か）成 平成四年三月十五日 小笠原徳一」		
建立年	平成4年3月15日		
お祭り等	当番の班により、1月28日か前の日曜日に幟を揚げ、しめ縄を張り、供物を供えて「龍燈祭」を行う。祭典後、餅投げを行う。 隣にある社「牛頭様」（牛頭天王）の祭典も一緒に行っている。 現在、地元の石神孝治氏が祭主を務めている。 御札は、町内会役員が秋葉神社上社に代参していただき、当番が龍燈内に祀っている。 幟は、正月と9月の神明宮例大祭の時にも揚げています。		
その他	旧龍燈は、北東の永安寺付近①にあったが、明治の初めに現在地のすぐ南前②に移転した。その後、道路拡張のため平成4年に現在地③に移転・改築された。 鬼瓦は、改築前の鬼瓦を磨いて載せた。 永安寺は、大正10年頃、台風のため倒壊し廃寺となっている。		



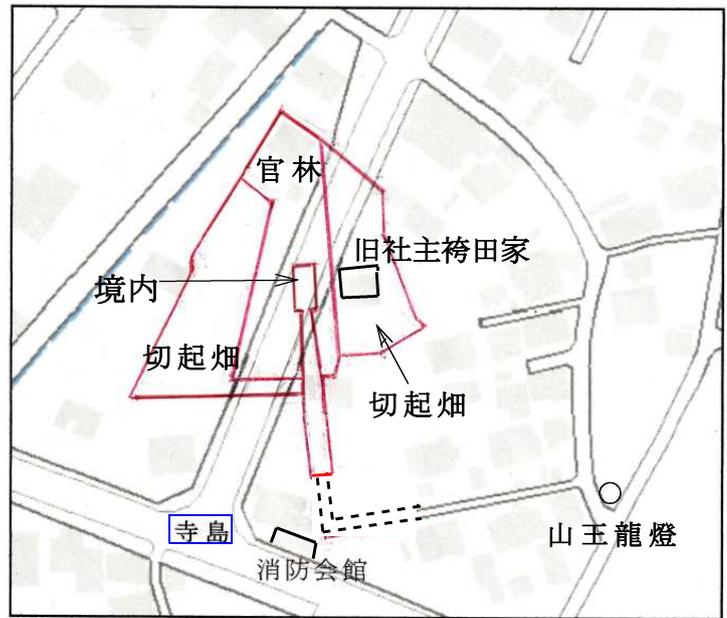
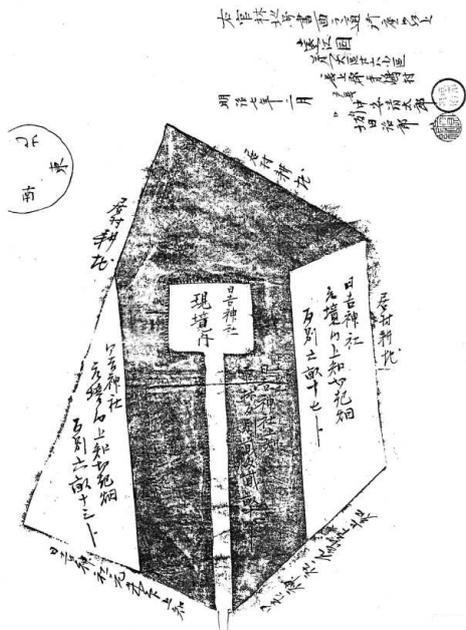
回覧

寺島の合祀前の各神社社地 (1)

明治4年、国の上知（上地）令により、これまでの社寺境内の内、神事・仏事に必要な部分だけを境内とし、他は国有地（官林等）となりました。また、布告により神社の合併整理が進められ、明治7年には、寺島にあった日吉神社（山王権現社）・天神社・八幡神社・八坂神社（牛頭天王社）・神明社内宮も、神明社外宮に合祀され神明宮となりました。

合祀前の社地はどうなっていたか、明治6年の「神明宮文書」、明治7年の「社寺官林地略図面」、明治8年の「社寺境内上知区分絵図面」、明治20～21年頃の「寺島村全村地図」の社地廃跡表示等を基に、およその社地図に表してみました。（社地図は、不正確な部分がある場合があります。）神明社内宮（字富永）・外宮（字間渡）については、「その41」に紹介してありますので、参照してください。

○日吉神社（元 山王権現社） 字山王



明治7年2月 社寺官林地略図面

国土地理院電子地形図に加筆

祭神	大山咋神	創建不明、慶安元年家光朱印状（4石8斗）	旧社主	袴田金木		
境内地	4畝12歩	官林	2反2畝18歩	切起畑	1反3畝	鳥居高さ1丈
氏子なし	祭礼	9月16日	本社	間口5尺	奥行7尺	（約1.5m×約2.1m）
拝殿	間口2間3尺	奥行2間2尺	（内宮・外宮より大きな社で、拝殿もあった。）			
社地の小字名は、「山王日吉社」						

比叡山の地主神「大山咋神」が、奈良時代に天台宗延暦寺創建後、延暦寺の守護神「山王」として日吉社に祀られました。平安時代に天台宗寺院が諸国に建立されると共に、山王の神（山王権現）が勧請され山王信仰が広がっていきました。明治時代に神仏分離令により山王権現の名が廃され大山咋神に、日吉社は日吉大社となりました。各地の山王権現社も日吉神社となりました。

○天神社 字天神



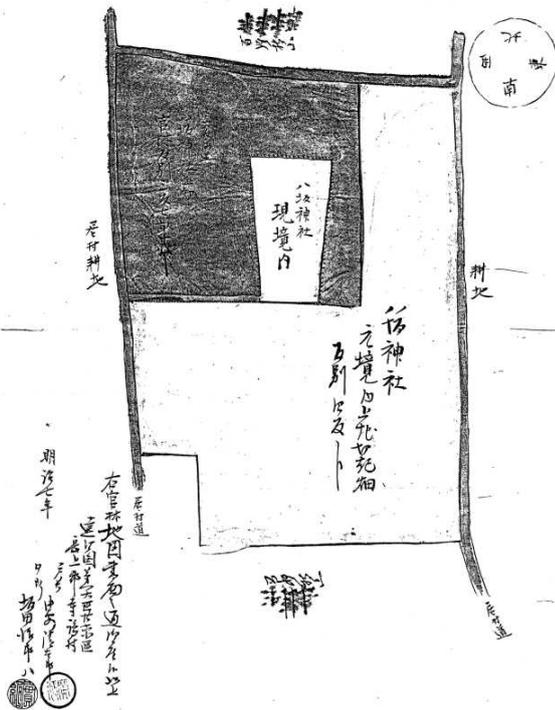
・「社寺官林地略図面」は無し

祭神	菅原道真公
創建不明	慶長3年(1598)再建
祭礼	1月11日
氏子無し	旧社守 辻治平
境内地	3畝20歩
本社	間口 2尺7寸
	奥行 2尺2寸
外屋	間口 7尺2寸
	奥行 8尺2寸

平安時代に学者・政治家であった菅原道真は、太宰府への左遷と失意の死後、御所への落雷での死傷者や天皇の崩御等

が道真の怨霊のためとして畏れられ、神として祀られるようになりました。後世に天神信仰として広がり、学問の守り神としても信仰されるようになりました。

○八坂神社 (元 ^{こずてんのう}牛頭天王) 字八坂



「寺島村全村地図」に表示された右の境内は、左の「寺社官林地略図面」と位置が異なりますが、左が当時の図として正しいと思われます。

明治7年2月 社寺官林地略図面

祭神	須佐男命 (元牛頭天王)	創建は不明	寛文3年(1663)再建	旧神官花井文太郎
祭礼	6月14日	境内地	2畝7歩	官林 3反7畝18歩
				切起畑 4反
鳥居高さ	8尺	本社	間口 3尺5寸	奥行 2尺9寸
				外屋 間口 9尺 奥行 8尺

牛頭天王は、疫病を司る神、また疫病除けの神ですが、農作物や家畜の疫病除けの神としても祀られていました。

回覧

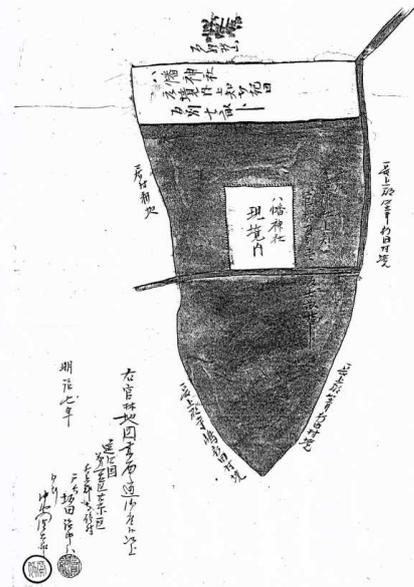
「寺島の歴史を探る」その46

作成 7班 太田隆雄

寺島の合祀前の各神社社地 (2)

前号に続いて、合祀前の八幡宮 (字八幡) と浅間神社 (字浅間) の社地の様子、及び合祀はありませんでしたが、寺島東 (元打上村) の八幡宮についても紹介します。

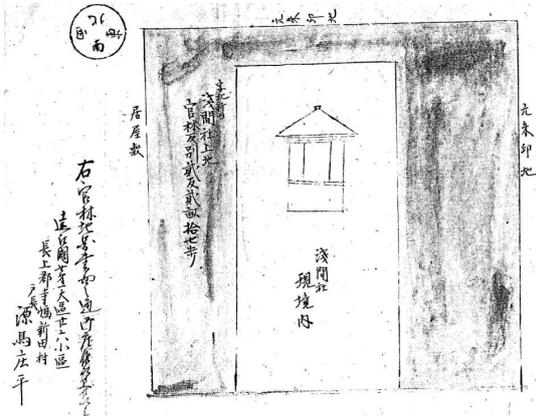
○八幡宮 字八幡



祭神	菅田別命	創立年度不詳	宝暦2年 (1752)	再建	旧社主	花井文太郎	
祭礼	8月16日	境内地	1畝20歩	官林	1反7畝27歩	切起田	7畝
本社	間口2尺8寸	奥行	2尺6寸				

菅田別命 (応神天皇) の神霊が、「八幡神」となり、武運の神として武家の崇敬を集めました。そして、各地に宇佐八幡宮の末社が建てられ、八幡信仰が広がりました。また、仏教守護の神として「八幡大菩薩」と称し、寺の鎮守神としても勧請されました。

○浅間神社 字北新田



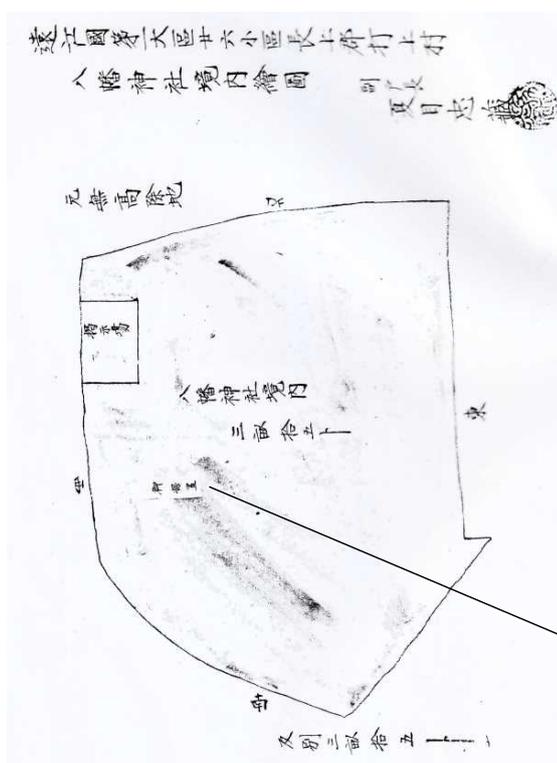
祭神	大山祇命	木花咲屋姫命			
慶長年間勧請と伝えられる	旧社主	花井文太郎	祭礼	正月16日	
本社	間口1尺7寸	奥行1尺3寸	雨覆	1間4尺四方	氏子なし
境内地	1畝3歩	官林	2反2畝17歩 (後1反8畝10歩に変更されている)		

富士の浅間神社神官であった花井家先祖がこの地に移り、勧請したといわれています。

○元打上村 八幡宮 字寺前

寺島東（元打上村）の八幡宮には、江戸時代まで日蓮宗妙教寺の守護神として八幡大菩薩が祀られていました。そして、妙教寺の七面大明神の参拝が盛んだったことから大黒松（後の「庄園の松」）は「明神松」と呼ばれました。

明治初めの神仏分離令により、八幡宮は妙教寺より分離独立し、寺島村との合併後も、寺島東の人々に今日まで崇敬されています。明治時代の八幡宮の様子を紹介します。



左図面と「寺島村全村地図」、昭和9年土地宝典を基に、社地の図（右）を作成しました。左図面には「御据置」とあり、上知とせず、そのまま境内地とされたこと示すものかも知れません。また、「揭示場」の表示があります。

「明治8年1月社地境内外上知区分絵図面取纏入」より

寺島村との合併後の「神明宮文書」(明治時代)によると、次のように記されています。

祭神	菅田別命 <small>ほんだわけのみこと</small>	由緒	慶長2年(1597)6月創立	祭礼	9月25日
本社	間口 2尺3寸	奥行	1尺7寸	雨覆	間口2間 奥行1間3尺
鳥居	高さ1丈5寸	幅	7尺7寸	「昭和11年4月24日改築許可」(後の書き加え)	
境内	150坪 (左の図では3畝15歩=105坪)		信徒41人		
境内神社2社					
白山神社	祭神 白山姫命 <small>しらやまひめのみこと</small>	由緒	本社に同じ	建物	間口1尺8寸 奥行2尺2寸
磯部神社	祭神 伊雑富命 <small>いざわとみのみこと</small>	由緒	本社に同じ	建物	1尺2寸四方
神官受持	東美蘭村郷社八幡宮祠官 鈴木 茂				



明治時代の妙教寺と八幡宮

- ・明神松の下に、茅葺きの妙教寺（左）と八幡宮の雨覆殿、本社、鳥居が見えます。
(万斛村鈴木家所蔵写真一部拡大)
- ・この後、明治43年3月に、瓦葺きの拝殿と渡り殿が新築されています。(神明宮文書)



寺島の学校の校地・校舎

「寺島の歴史を探る」その4で、「寺島の学校の移り変わり」について紹介しましたが、今回は、その学校の校地・校舎の図と様子を紹介します。その4も参照してください。



明治20年頃の「寺島村全村地図」より

・校舎が建設される前で「林」となっている

現在の地理院地図より

・旧公会堂の辺りに校舎があった

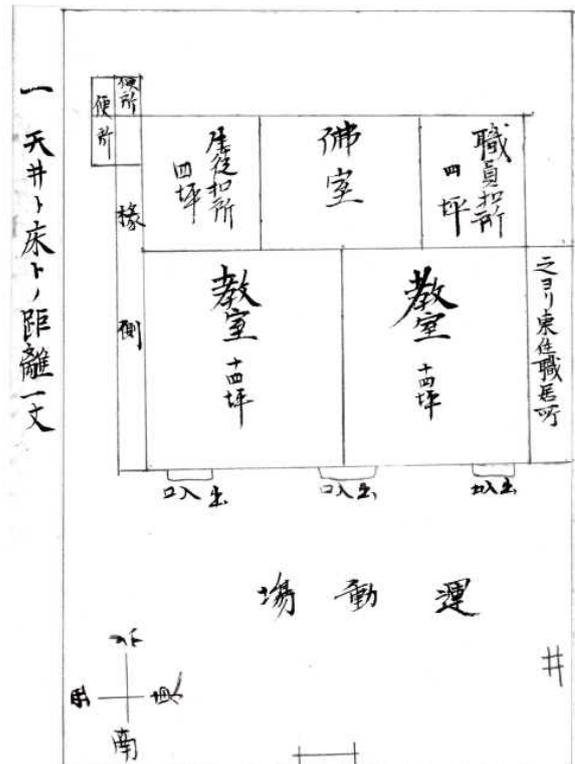
○木舟新田学校寺島分校・寺島学校

(大伝寺)

明治5年の学制頒布により、明治6年、木舟新田学校が長泉寺に開校され、明治7年10月、寺島分校が開校されましたが、校地・校舎の設備がなく、大伝寺を借用して教場とし、同庭内を運動場としました。

「寺島尋常小学校沿革誌」の図によると、教室は仏室の前に2か所（28坪）、左右に職員・生徒控え所があり、便所が1か所ありました。前庭の運動場は80坪で井戸がありました。

明治10年に独立し、寺島学校となり、その後校名が変わりながら、21年、旧公会堂の地に校舎が新築されるまで、授業が行われました。



回覧

寺島の舟形屋敷

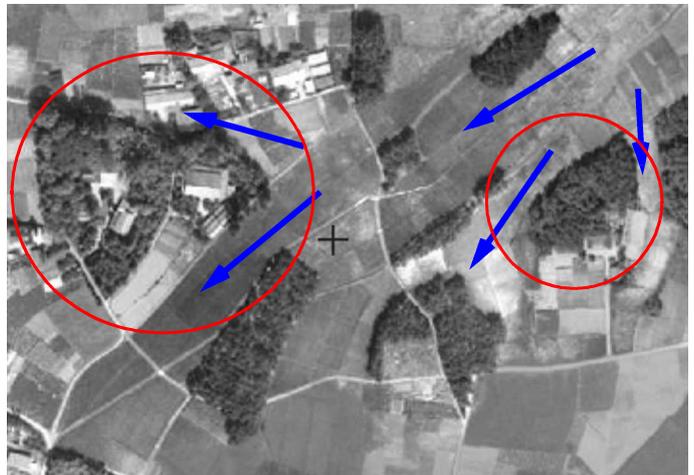
天龍川は、古くから氾濫を繰り返し、流路を変えていました。水害を防ぐために人々は、堤防を造り、修復を繰り返し、また、屋敷を守るための工夫をしてきました。

そのような屋敷を水害や強風から守るための工夫が見られる舟形屋敷を紹介します。

清水の中安家本家は、天正10年（1582）頃寺島に土着して地域の開発を進め、江戸時代には代々庄屋を努めてきたとされる家柄ですが、その屋敷の土地は現在まで、舟形屋敷と言われる形跡を残しています。



明治頃の中安家屋敷



中安家と森重家 1960年代の写真(国土地理院)
(左) (右)

中安家の昔の建物配置図をもとに絵に描くと左上のようになりますが、本家と分家を合わせた土地が、東を舳先とした舟の形になっています。

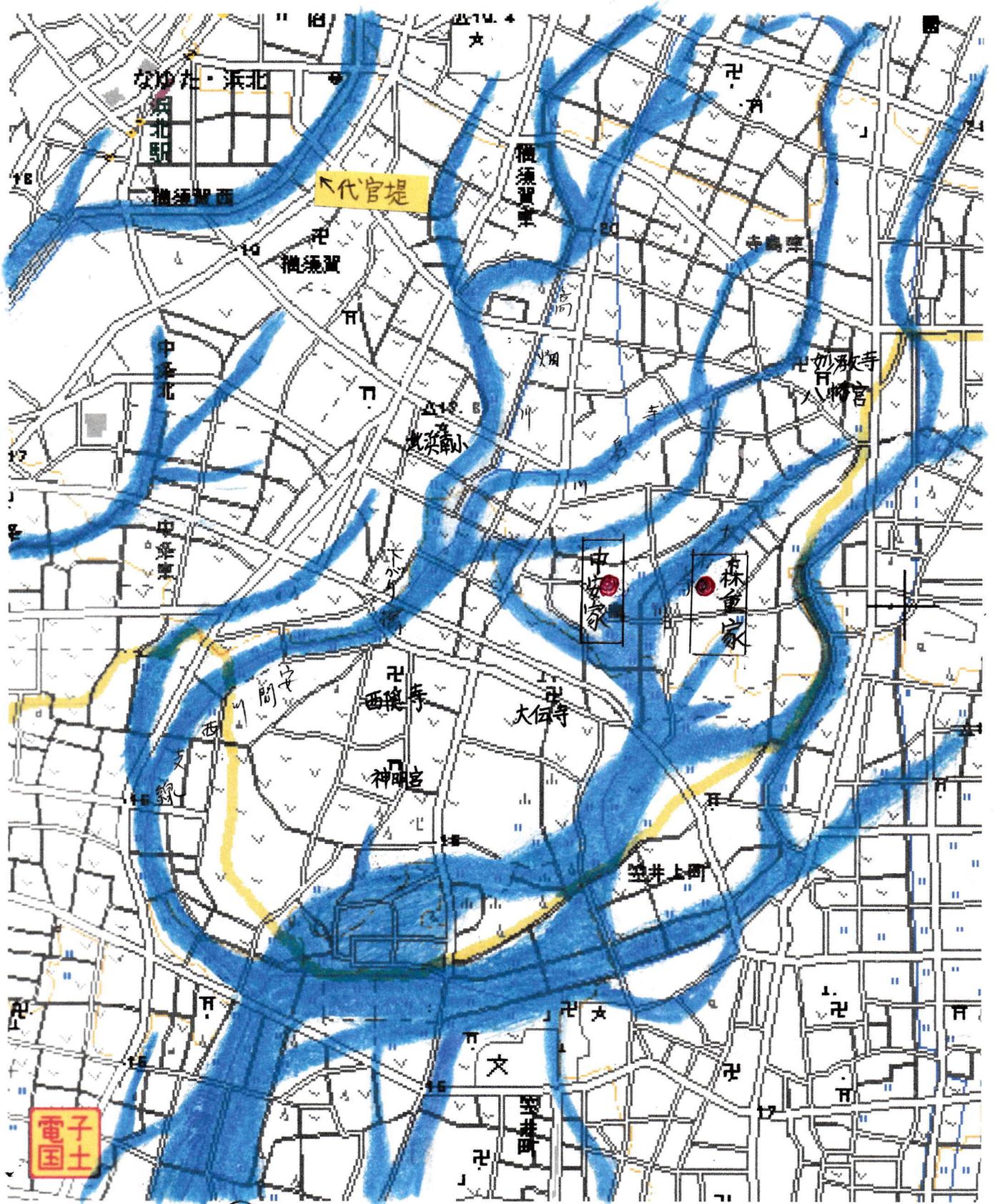
現在田になっている南東側が川跡であり、北東からの川の流れが、洪水の時には舳先によって左右に分けられ、また、屋敷の周りは樹木、マキの垣根で囲まれていて、濁流に直撃されないようになっています。これは防風林ともなっています。

右上の写真にある東新田の森重家は、屋敷の北側が舟形地形の山林になっていて、水害から守られています。川跡の砂礫を掘り、田を作った時に積み上げたといわれています。

その時出土したいくつもの古い墓石を集めて祀り、また、林の前には「山の神」を祀って屋敷を守っています。



小天竜跡



石蔵川
安間川

寺島周辺の河川の跡図

国土地理院 土地条件図をもとに作成

(太田)

令和5年6月1日

回覧

「寺島の歴史を語る」その49

作成 7班 太田隆雄

TEL 587-3063

日清・日露戦捷記念碑と忠魂碑



左の写真は、神明宮境内に明治44年9月に寺島の人々によって建立された「日清・日露戦捷記念碑」と「忠魂碑」です。

戦捷記念碑（戦いの勝利を記念した碑）には、明治27年と明治37年に始まった日清・日露戦争に従軍した32名の所属軍名・階級・叙勲・姓名が刻まれています。

また、忠魂碑には、戦没された6名の所属軍名・階級・叙勲・戦歴・姓名が刻まれています。忠魂碑の揮毫は、陸軍大将男爵 大久保春野、石工 松下忠吉、建設委員名が13名となっています。

大久保春野は磐田の神官で遠州報国隊に参加、東京招魂社（後の靖国神社）の初代祭主となった人物です。

基壇の周りには、多くの寄附者の氏名が刻まれています。



明治6年に徴兵令が發布されて以来、明治22年には、大日本帝国憲法のもと、国民は兵役の義務を負うことが定められました。満20歳になると、男子は徴兵検査を受け、選ばれた者は兵役に就きました。

多くの方が従軍し、日清・日露戦争には勝利しましたが、その中でそれぞれ約1万3千人、約8万4千人もの戦没者がいました（国史大辞典）。浜北全体では57人、その内北浜村地内では20人の戦没者がいました（「浜北市内戦没者名簿」浜北市教育委員会編集）。寺島自治会では、毎年、神明宮例大祭の日に、忠魂碑前において戦没者の慰霊祭を行っています。

○日清日露戦捷記念碑 従軍者姓名 32名 (階級及び叙勲は省略します)

陸軍	軍医	姓名等を記録してありますが、今回この紙上では記載を控えます。ご遺族の方で確認されたい方は、お知らせください。	陸軍	輜重兵 ^{しちょう}	
	〃			歩兵	
	歩兵			近衛歩兵	
	〃			歩兵	
	〃			〃	
	〃			〃	
	輜重兵 ^{しちょう}			〃	
	近衛歩兵			輜重兵 ^{しちょう}	
	〃		故	〃	
	歩兵			〃	
	〃			〃	
	〃			〃	
	〃		〃	故	
	〃		歩兵		
	〃	故	〃		

○忠魂碑 戦没者名 6名 (戦歴・階級及び叙勲は省略します)

海軍	水兵	上記と同様です。	陸軍	歩兵
	〃			〃
				〃
				〃

認定文化財の説明板を設置しました

これまで浜松市地域遺産として認定された寺島の文化財の簡単な説明板を設置しました。散歩の途中でも寄って、是非御覧ください。

- ・山王の秋葉山常夜灯
- ・寺島の半僧坊里程石
- ・西隠寺椿薬師像
- ・寺島の道祖神
- ・大伝寺の弘法大師像
- ・中安家土蔵

<設置例>



* 袴田三男氏宅の西ヶ崎コースの里程石は、元の若草団地南交差点北西角に移されました。

寺島の歴史年表 1

「寺島の歴史を探る」その50を迎え、これまで調査し回覧した事柄を年表にまとめてみました。今回は、江戸時代までのできごとをまとめました。

	西暦・年号	できごと	
平安	1100頃～	美藪御厨（伊勢神宮の荘園）が成立し、御厨を守護する神社として寺島の神明社が勧請されたという。（内宮と外宮）	
鎌倉	1200頃～ 1248（宝治2）	寺島神明宮周辺の宮東遺跡より、鎌倉時代の山茶碗の破片が多く見ついている。ここに人々の生活があった。 法燈圓明国師大和尚が阿弥陀堂を開創する。（後の大伝寺）	
室町	1381（永徳1） 1573（天正1）	奥山三生院二世暘谷玄輝和尚が西隠寺を開く。 打上に釈迦堂が創立される。（後の妙教寺）	
安土 桃山	1593（文禄2） 1595（文禄4）頃 1601（慶長6）	大伝寺が8世寶岩和尚の時、方広寺末となる。 打上の明神松（後の庄園の松）が芽生える。 寺島村が浜松城主 松平忠頼領となる。 松平忠頼郷村帳に寺島村の名が見える。	
江	1609（慶長14） 1615（元和1） 1619（元和5）	寺島村が遠江・駿河国主 徳川頼宣領となる。 日蓮宗妙恩寺12世了雲院日上人が妙教寺を開く。 寺島村が代官秋鹿氏の幕府領となる。 秋鹿文書に寺島村「同所新田」とあり、寺島村の分地が成る。	
	1626（寛永3）	浅井長四郎朝正（秋鹿朝正）宛文書に「寺島新田村」の名がある。幕府の命により代官秋鹿氏の寺島村・寺島新田村・石原村の支配地が、寛永9年まで青山伯耆守忠俊に引き渡される。	
	1648（慶安1）	山王の山王権現社領の家光朱印状写しが元神官袴田家に残されている。以後、家茂まで9代の写しがある。	
	1664（寛文4）か 1665（寛文5）	寺島村・寺島新田村が、代官市野惣太夫の幕府領となる。 岩水寺の鐘再鑄の銘に、寺島村の大村彦五郎正延の名が見える。明治7年まで大工彦五郎の名が受け継がれている。	
	戸	1671～72 （寛文11～12）	寺島村より打上村が分村する。有玉村高林家文書に「打上村」の名が見える。
		1680（延宝8）頃	青山御領分絵図に「打上村」の名が見える。
1698（元禄11）		元禄地方直しにより、寺島3村が、幕府中泉代官領となる。	

江戸	1700前後頃	西隠寺9世黙源が椿薬師如来を建立する。	
	1703(元禄16)	寺島村・打上村が旗本五井松平氏の領地に、寺島新田村が五井松平氏と北条氏(後、松平氏)の領地となる。	
	1727(享保12)	西隠寺10世瑞龍和尚が、大乘妙典千部供養塔を建立する。	
	1762(宝暦12)	大伝寺15世空萬石和尚が大般若經を真読し、西国三十三観音を集めて供養、聖観音を16世龍水蓮和尚が建立する。	
	1768(明和5)	寺島山王の秋葉山常夜灯が建立される。浜北区内で最も古い3基の一つ。灯明箱もある。現龍燈は昭和63年建立。	
	1775(宝暦5)	椿薬師に寺島新田村 花井理兵(衛)が手水鉢を奉納する。	
	1785(天明5)	寺島村内で、木舟村と笠井村の大念仏の大喧嘩が起こる。	
	1786(天明6)	寺島村を含む23か村の百姓により笠井村の商家・庄屋への打ちこわしが起こる。	
	1789(寛政1)	内山真龍が、遠江国風土記伝執筆のための現地調査の時、寺島村の椿薬師を参詣する。	
	1792(寛政4)	「遠江國風土記伝」に寺島について「この地は昔寺宇十五坊ありき」の記事がある。西隠寺の椿薬師について「西隠寺持ち、椿一株を靈木と為す」とある。	
	1802(享和2)	東新田の牛頭様内に最も古い棟札が残されている。	
	1816(文化13)	この頃新四国八十八所巡りが始まり、大伝寺に弘法大師像が安置される。大伝寺は88番札所。	
	1822(文政5)	大伝寺の入佛開眼夜燈帳が残されている。西国三十三観音の記事もある。	
	1825(文政8)頃	西隠寺の鎮守摩利支天が祀られる。	
	1841(天保12)	五井松平家が知行する村々の絵地図・石高などを記した御知行所村々手留が残されている。同じころの寺島村・寺島新田村絵図が大伝寺に残されている。	
	1842(天保13)	間渡の龍燈内に天保13年の棟札が残されている。現龍燈は昭和38年建立。瓦製灯籠と灯明箱が残されている。	
	江戸	1856(安政3)	西隠寺の乗り物駕籠が、下都田村吉景の塗師屋佐五郎により製作される。細江町中川新屋の宗安寺に納められるが、廢寺後に西隠寺に移される。
		1858(安政5)	寺島村の午御年貢取立帳が中安家に残されている。明治初めまで8冊あり。
		1859(安政6)	内野村の横田保兵衛實久(横田保)が椿薬師前に常夜灯を奉納する。
	1863(文久3)	大村弥平次宅東の道沿いに地藏菩薩が安置される。西隠寺の原田頑翁和尚の手習い手本が、中安家に残されている。花井家には明治2年の手本が残されている。	
	江戸時代(年代不明)	清水の三叉路に道祖神が安置される。	

寺島の歴史年表 2

前号に続き、これまで調査し回覧した事柄を年表にまとめました。今回は、明治時代以降のできごとをまとめました。神明宮の歴史については、「神明会館完成記念誌」（平成29年発行・各戸配布済み）の「神明宮の歴史」を御覧ください。

	西暦・年号	できごと
明	1874（明治7）	神明社（内宮）（外宮）・日吉神社・天神社・八坂神社・八幡宮が合祀され、神明宮となる。 木舟新田学校寺島分校が、大伝寺に設置される。
	1875（明治8）	区内各村取纏帳に寺島3村の記事がある。 社寺境内外上知区分絵図面取纏に、寺島の各神社の詳細が記される。
	1876（明治9）	寺島村・寺島新田村・打上村が合併し、寺島村となる。 西隠寺18世原田頑翁の事績を刻んだ墓を19世石翁が建立する。
	1877（明治10）	木舟新田学校寺島分校が寺島学校として独立する。
	1885（明治18）頃	寺島の半僧坊道に里程石が設置される。
	1887（明治20）	寺島本田の秋葉山常夜灯が建立される。
	1888（明治21）頃	地押調査を基にした「寺島村全村地図」と、明治22年発行の地券が残されている。同じ年、地券が廃止される。 前の寺島公会堂の地に校舎が新築され、大伝寺より移転して授業が行われる。
治	1889（明治22）	寺島村ほか7村が合併し、美島村となる。合併前後に合併・分離紛議が起こる。
	1891（明治24）	庄屋を務めた中安家の分家の主屋が建てられる。現在築約130年
	1892（明治25）	寺島尋常小学校として独立する。 横須賀の宝珠寺薬師堂内の俳句額に、寺島の習静の句がある。
	1896（明治29）	豊西町御嶽神社境内の「百人一句塚」に寺島の知新・月洲・秋湖・習静の句碑がある。
	1898（明治31）	大伝寺境内に神社仏閣拝礼供養塔が建立される。
	1900（明治33）	寺島に二六合資会社が設立される。
	1903（明治36）	寺島第二区長中安清太郎の記録簿が残されている。
	1904（明治37）	清水の秋葉山常夜灯が建立される。

明治	1905 (明治38)	二六合資会社が解散し、二六信用銀行が設立される。
	1906 (明治39)	笠井町福来寺境内に建てられた「十湖百句塚」に寺島の習静の句碑がある。(現在は豊西町に移設)
	1908 (明治41)	美島村と平貴村の一部が合併し、北浜村となる。 横須賀に北浜尋常小学校が設置される。
	1909 (明治42)	寺島門前組に10年間の無尽講の帳簿が残されている。 北浜尋常高等小学校と改称される。
	1911 (明治44)	神明宮境内に、日清・日露戦捷記念碑(従軍者32名姓名)と忠魂碑(戦没者6名)が建立される。
大正	1915 (大正4)	浅間神社が神明宮に合祀される。
	1921 (大正10)	中安家の大型土蔵が建築される。昭和6年、 ^{ひまし} 庇改築。
昭和	1929 (昭和4)	二六信用銀行が解散する。西遠銀行(2次)が買収との記録もある。
	1934 (昭和9)	大伝寺に織物の研究・織機の改良発明した水野久平の碑が、弟子たちにより建立される。
	1937 (昭和12) 頃	寺島の山庄が創業する。平成14年頃廃業する。
	1938 (昭和13)	打上の「庄園の松」が国天然記念物に指定される。
	1941 (昭和16)	北浜村国民学校と改称される。
	1945 (昭和20)	空襲避難のため、初等科児童を分散して授業をする。
	1947 (昭和22)	新学校教育制度が始まり、北浜村立北浜小学校・中学校となる。
	1951 (昭和26)	竜池村が北浜村に編入される。
	1954 (昭和29)	寺島に北浜南託児所が開設される。
	1955 (昭和30)	渥美知新翁の句碑が、大伝寺に十湖門弟などにより建立される。
	1956 (昭和31)	北浜村と浜名町ほか3村が合併し、浜北町となる。
	1957 (昭和32)	北新田龍燈の棟札あり。現龍燈は平成2年建立。
	1958 (昭和33)	北浜南託児所が、北浜南幼稚園に昇格する。
	1962 (昭和37)	神明宮の本殿が改築される。
	1963 (昭和38)	浜北町が浜北市となる。神明宮の拝殿が改築される。
1973 (昭和48)	若草団地が造成される。	
1981 (昭和56)	庄園の松が、松食い虫の被害により伐採される。指定解除される。(樹齢385年)	
1984 (昭和59)	北浜小学校より、北浜南小学校が分離開校する。	
平成	1991 (平成3)	休止されていた寺島の大念仏が3年ぶりに復活する。
	1992 (平成4)	東新田の現龍燈が建立される。
	2005 (平成17)	浜北市が浜松市に編入される。
	2007 (平成19)	浜松市が政令指定都市に移行、浜松市浜北区となる。
	2013・14 (平成25・26)	寺島の宮東遺跡と寺島天神遺跡が登録される。

追加版「寺島の歴史を探る」

その35～51

執筆 太田隆雄（寺島7班）

TEL 053-587-3063

発行 令和6年3月1日

浜松市浜名区寺島自治会